

惠昕本『六祖壇經』の研究（續）

——定本の試作と敦煌本との對照——

石 井 修 道

再校に當りて

この「惠昕本『六祖壇經』の研究（續）」——定本の試作と敦煌本との對照」は「駒澤大學佛教學部論集」第一一號（昭和五五年一月）に續くものである。この惠昕本『六祖壇經』卷下は初校をすでに終えていたものであるが、紙數の關係等により本號に掲載されることになつたので、最初の餘白にいささか感想を記したい。

私は昭和五五年度の短大佛教科の授業で、寛永八年本の壇經をテキストとして演習した。一方、佛教學部の中國禪宗史を専攻したいという學生と『景德傳燈錄』を演習していたが、それらの學生に「壇經を讀んだことがありますか」と聞いたところ「授業にないから讀んだことがない」と答えた。私は「壇經を讀まないならば、中國禪の文獻としてその外に何を讀みますか」と聞いたけれども、積極的な答えはなにも聞かれなかった。今、再校を前にしてその時のことがしきりに思い出されるのである。

道元禪師は『正法眼藏行持』に六祖慧能を、

六祖は新州の樵夫なり、有識と稱しがたし。いとけなくして父を喪す、老母に養育せられて長ぜり。樵夫の業を養母の活計

とす。十字の街頭にして一句の聞經よりのち、たちまちに老母をすてて大法をたづぬ。これ奇大の大器なり、拔群の辨道なり。斷臂たとひ容易なりとも、この割愛は大難なるべし、この棄恩はかるかるべからず。黃梅の會に投じて、八箇月ねぶらずやすまず、晝夜に米をつく。夜半に衣鉢を正傳す。得法已後、なほ石臼をおひありきて、米をつくこと八年なり。出世度人説法するとも、この石臼をさしおかず。希世の行持なり。

と述べられる。授業の開講とは關係なく、奇代の大器である六祖の拔群の辨道を學ぶためには是非多くの學生が『六祖壇經』を讀まれることを願うものである。

なお最近の研究である柳田聖山先生の「敦煌本『六祖壇經』の諸問題」（『講座敦煌8『敦煌佛典と禪』』所收 大東出版社 昭和五五年一月）は、壇經研究に有意義な示唆を與えられる論文であることを付記しておこう。

一九八一・九・二三

京都にてしるす

三五 卷下の首題

* 六祖壇經卷下 || 韶州曹溪山六祖師壇經卷下(金) || 韶州曹溪山六祖師壇經下(大)。* 依眞小師邕州羅秀山惠進禪院沙門惠昕述 || ナシ(金)
(大)(興)(寛)。

(31) * 六祖壇經卷下

依眞*小師邕州羅秀山惠進禪院沙門惠昕述

六祖壇經卷下

依眞の小師邕州羅秀山惠進禪院の沙門惠昕述ぶ。

三六 目錄(下卷)

(32)

七、說摩訶般若波羅蜜*門。

八、現西方相狀門。△武帝問功德附。*

九、諸宗難問門。

十、南北二宗見性*門。

十一、教示十僧門。△示寂年月附。*

* 蜜 || 密(大)。以下同。* 現 || 問答功德及(興)(寛)。* △武帝問功德附 || ナシ(興)(寛)。* 問 || ナシ(大)。* 附 || ナシ(金)。* 性 || ナシ(底)。* 十 || ナシ(底)。* 僧 || 僧傳法(興)(寛)。* △示寂年月附 || ナシ(興)(寛)。

七、摩訶般若波羅蜜を説く門。

八、西方の相狀を現わす門。△武帝、功德を問うを附す。*

九、諸宗の難問する門。

十、南北の二宗、見性の門。

十一、十僧に教示する門。△示寂の年月を附す。*

三七 般若波羅蜜の法

(26) 今既自歸依三寶。總各各至心。與善知識、說摩訶般若波羅蜜法。善知識雖念不解。惠能與說、各各聽。摩訶般若波羅蜜者、西國梵語、唐言大智惠彼岸到(到彼岸)。此法須行、不在口(念)。口念不行、如(幻)如化。修行者法身與佛等也。何名摩訶。摩訶者是大。心量廣大、猶如虛空。莫定心坐、即落無(空)既空。(虛空)能含日月星辰・大地山河・一切草木・惡人善人・惡法善法・天堂地獄、盡在空中。世人性空、亦復如是。

*善知識||ナシ(興)(寬)。*至||志(金)(大)。*本體||ナシ(興)(寬)。*食||食不飽(興)(寬)。某甲與說||終無有益(興)(寬)。*說||念(興)(寬)。*幻||幻如化如露(興)(寬)。*是||是以下二丁二行ハ惠玉の補寫(金)。*量||量廣大(興)(寬)。*小||少(底)。*非||亦非(興)(寬)。*無||亦無(金)(興)(寬)。*有||ナシ(底)。*喻此大空||ナシ(興)(寬)。*著空||空(底)(金)(大)。*淨||靜(興)(寬)。*復||須(金)(大)。

「今、既に自ら三寶に歸依す。總て各各至心にせよ。善知識の與に摩訶般若波羅蜜の法を説かん。善知識は、念ずと雖も解ら

(33) 七、說摩訶般若波羅蜜門。

師言、善知識、既識三身佛了。更爲善知識、說摩訶般若波羅蜜法。各各至心諦聽。世人終日口念本體、不識自性。猶如誦食。口但說空、萬劫不得見性。某甲與說、善知識、摩訶般若波羅蜜是梵語、此言大智惠到彼岸。此須心行、不在口說。口念心不行、如幻如電。口念心行、即心口相應。本性是佛、離性無別佛。何名摩訶。摩訶是大。心量猶如虛空、無有邊畔。亦無方圓大小、非青黃赤白、亦無上下長短、無嗔無喜、無是非、無善無惡、無有頭尾。諸佛刹土、盡同虛空。世人妙性本空、無有一法可得。喻此大空、自性真空、亦復如是。善知識、今聞某甲說空、便即著空。第一莫著空。若空心淨坐、即落無記空、終不成佛法。善知識、世界虛空、能含萬物色象。日月星宿・山河泉源溪澗・一切樹木・惡人善人・惡法善法・天堂地獄・一切大海・須彌諸山、總在空中。世人性空、亦復如是。

七、摩訶般若波羅蜜を説く門。

師言く、「善知識よ、既に三身佛を識り了る。更に善知識の爲に摩訶般若波羅蜜の法を説かん。各各至心に諦聽せよ。世人は終

ず。「惠能、與に説かん、各各聽け。摩訶般若波羅蜜とは、西國の梵語なり、唐には大智惠到彼岸と言う。此の法は須らく行ぜずべし、口に念ずるに在らず。口に念じて行ぜざれば、幻の如く化の如し。修行とは法身と佛と等しきなり。何をか摩訶と名づくる。摩訶とは、是れ大なり。心量は廣大なり、猶お虚空の如し。「心を空じて坐すること莫れ、即ち無記空に落ちん」。「虚空は能く日月星辰・大地山河・一切の草木・惡人善人・惡法善法・天堂地獄を含んで盡く空中に在り。世人の性の空なるも、亦復た是の如し」。

三八 摩訶の意味

(27) 性含萬法是大。萬法盡是自性。見一切人及非人、惡知與善、惡法善法、盡皆不捨、不可染著、由如虛空、名之爲大。此是摩訶行。迷人口念、智者心(行)。又有名人、空心不思、名之爲大、此亦不是。心量大(事)、不行是少。莫口空

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

口口に本體を念じて自性を識らず。猶お食を誦うるが如し。口但だ空を説くも、萬劫にも見性することを得ず。「某甲、與に説かん、善知識よ、摩訶般若波羅蜜は是れ梵語なり、此には大智惠到彼岸と言う。此れは須らく心に行ぜずべし、口に説くに在らず。口に念じて心に行ぜざれば、幻の如く雷の如し。口に念じて心に行ぜば、即ち心と口と相い應ず。本性は是れ佛なり、性を離れて別の佛無し。何をか摩訶と名づくる。摩訶とは是れ大なり。心量は猶お虚空の如く、邊畔有ること無し。亦た方圓大小も無く、青黄赤白にも非ず、亦た上下長短も無く、嘖無く喜も無く、是非無く非も無く、善無く惡も無く、頭尾有ること無し。諸佛の刹土は、盡く虚空に同じ。世人の妙性は本と空にして、一法の得べきもの有ること無し。此を大空に喩う、自性の眞空も、亦復た是の如し」。「善知識よ、今、某甲の空を説くことを聞いて、便即ち空に著せん。第一に空に著すること莫れ。若し心を空じて淨坐せば即ち無記空に落ち、終に佛法を成ぜず」。「善知識よ、世界の虚空は、能く萬物の色象を含む。日月星宿・山河泉源溪澗・一切の樹木・惡人善人・惡法善法・天堂地獄・一切の大海・須彌諸山、總て空中に在り。世人の性の空なるも、亦復た是の如し」。

(34) 師言、善知識、自性能含萬法、是大。萬法在善知識性中。若見一切人惡之與善、盡皆不捨、亦不染著、心如虛空、名之爲大。善知識、迷人口説、智者心行。又有迷人、空心淨坐、百無所思、自稱爲大。此一輩人、不可共説、爲邪見故。

説。不修此行、非我弟子。

善知識、心量廣大、廓周法界。用卽了了分明、應用遍^{*}知一切。一切卽^{*}一、一卽一切。去來自由、心體無滯、此卽是。善知識、一切般若智心、皆從自性而生、不從外入。莫錯用意。名^{*}眞自用、一眞一切眞。心量大事、不行小道。口莫終日說空、心中不修^{*}此行。恰似凡人自稱國王、終不可得。非吾弟子。

* 師言||ナシ(興)(寛)。* 是大||是名爲大(金)(大)。* 善知識||自(金)(大)。* 知||興)ハ「知」以下一丁四六二字分を缺ク。* 人||ナシ(大)。* 之||ナシ(底)。* 皆||皆不取(寛)。* 大||大故曰摩訶(寛)。* 淨||靜(寛)。* 遍||徧(金)||便(寛)。* 卽||是(底)(金)(大)。* 自由||ナシ(底)。* 此卽||此(底)(金)(大)。* 心||ナシ(寛)。* 名眞||名爲眞性(寛)。* 修||修行(底)。

「性の萬法を含むは是れ大なり。萬法は盡く是れ自性なり。一切の人及び非人、惡と善と、惡法善法を見て、盡く皆な捨てず、染著すべからず、心は虚空の如くなるを、之れを名づけて大と爲す。此は是れ摩訶行なり。」「迷人は口に念じ、智者は心に行ず。又た迷人有りて、心を空じて思わず、之を名づけて大と爲すは、此れ亦た是からず。」「心量の大事は、行ぜざれば是れ小なり。口に空しく説くこと莫れ。此の行を修せざるは、我が弟子に非ず」。

師言く、「善知識よ、自性の能く萬法を含むは是れ大なり。萬法は善知識の性中に在り。若し一切の人の惡と善とを見て、盡く皆な捨てず、亦た染著せずんば、心は虚空の如くなるを、之れを名づけて大と爲す。」「善知識よ、迷人は口に説き、智者は心に行ず。又た迷人有りて、心を空じて淨坐し、百も所思無きを、自ら稱して大と爲す。此の一輩の人は、共に説くべからず。邪見を爲すが故なり。」「善知識よ、心量は廣大にして、法界を廓周す。用うれば卽ち了了として分明、應用して遍く一切を知る。一切卽ち一、一卽ち一切なり。去來自由にして、心體の滯ること無きとは、此れ卽ち是れなり。」「善知識よ、一切の般若の智の心は、皆な自性より生じ、外より入らず。錯^{*}つて意を用うることを莫れ。眞の自用と名づくるは、一眞なれば一切眞なり。心量の大事は、小道を行ぜず。口に終日空を説いて、心中に此の行を修せざること莫れ。恰かも凡人の自ら國王と稱するも、終に得べからざるに似たり。吾が弟子に非ず」。

三九 般若波羅蜜の意味

(28) 何名般若。般若是智惠。一(切)時中、念念不愚、常行智惠、即名般若行。一念愚即般若絕、一念智即般若生。

(世人)心中常愚、(自言)我修般若。(般若)無形相、智惠性即是。何名波羅蜜。此是西國梵音、(唐)言彼岸到。解義

離生滅、著竟生滅去。如水有波浪、即是於此岸。離境無生滅、如水承長流。故即名到彼岸、故名波羅蜜。迷人口念、智者心行。當念時有妄、有妄即非真有。念念若行、是名真有。

悟此法者、悟般若法、修般若行。不修即凡、一念修行、法身等佛。善知識、即煩惱是菩提(衍字)。前念迷即凡、後念悟即佛。

善知識。摩訶般若波羅蜜、最尊・最上・第一、無住無去無來。三世諸佛從中出。將大知惠到彼岸、打破五陰煩惱塵勞。最尊

・最上・第一、讚最上(乘)。最上乘法修行、定成佛。無去無住無來往、是定惠等、不染一切法。三世諸佛從中(出)、變

三毒、爲戒定惠。

* 惠 || 慧(金) || 惠也(寬)。* 漢 || 此(寬)。* 離 || 觀(底)(金)(大)。

凡夫即佛(寬)。* 是 || ナシ(金)(寬)。* 凡 || 凡夫(寬)。* 知 || 智(金)。

* 打 || (興)ハ「打」マデヲ缺ク。* 人 || 此(興)(寬)。

「何をか般若と名づくる。般若とは是れ智惠なり。一切の時中、念念に愚ならず、常に智惠を行するを、即ち般若の行と名づく。

一念愚なれば、即ち般若は絶し、一念智なれば、即ち般若が生

(35) 善知識、何名般若。般若是智惠*。一切處所、一切時中、念念不愚、常行智惠、即是般若行。一念愚即般若絶、一

念智即般若生。世人愚迷、不見般若。口說般若、心中常愚、自言我修般若。念念說空、不識眞空。般若無形相、智惠心即

是。若作如是解、即名般若智。何名波羅蜜。此是西國語、漢言到彼岸。解義離生滅、著境生滅起。如水有波浪、即是於此

岸。離境無生滅、如水常通流。即名爲彼岸、故號波羅蜜。善知識、迷人口念、當念之時、有妄有非。念念若行、是名眞

性。悟此法者、是般若法。修此行者、是般若行。不修即凡、一念修行、法身等佛。善知識、煩惱即是菩提。前念迷即凡、

後念悟即佛。前念著境即煩惱、後念離境即菩提。善知識、摩訶般若波羅蜜、最尊・最上・最第一、無住無往來。三世諸佛、

皆從中出。用大智惠、打破五蘊煩惱塵勞。若人修行、定成佛道、變三毒、爲戒定惠。

* 念 || ナシ(底)。* 修 || 修行(底)。* 修業 || 相應(金)(大)。* 識 || 識

以下同。* 最尊 || ナシ(金)。* 來 || 無來(寬)。* 用 || 當用(寬)。

「善知識よ、何をか般若と名づくる。般若とは是れ智惠なり。

一切の處所、一切の時中、念念に愚ならず、常に智惠を行するは、即ち是れ般若の行なり。一念愚なれば、即ち般若は絶し、一念智

ず。世人の心中は常に愚にして、自ら言う、我れは般若を修す、と。般若は形相無し、智慧の性即ち是れなり。何をか波羅蜜と名づくる。此れは是れ西國の梵音にして、唐には到彼岸と言う。義を解れば生滅を離れ、境に著すれば生滅起る。水の波浪有るを、即ち是れ此岸に於てするが如し。境を離るれば生滅無く、水の永長に流るるが如し。故に即ち到彼岸と名づけ、故に波羅蜜と名づく。「迷人は口に念じ、智者は心に行ず。念ずる時に當つて妄有り、妄有れば即ち眞有に非ず。念念に若し行ぜば、是れを眞有と名づく。此の法を悟る者は、般若の法を悟り、般若の行を修す。修せずんば即ち凡なるも、一念も修行すれば、法身と佛と等し。「善知識よ、即ち煩惱は是れ菩提なり。前念迷えば即ち凡、後念悟れば即ち佛なり。「善知識よ、摩訶般若波羅蜜は、最尊・最上・第一なり。住すること無く、去ること無く、來ること無し。三世の諸佛は中より出ず。大智慧到彼岸を將つて、五陰の煩惱塵勞を打破す。最尊・最上・第一とは、最上乘を讚するなり。最上乘の法は、修行せば定んで佛と成る。去ること無く、住すること無く、來往すること無しとは、是れ定惠等しくして一切法に染まざるなり。三世の諸佛は中より出ずとは、三毒を變じて戒定惠と爲すなり」。

四〇 智慧のはたらき

(29) 善知識、我此法門、從八萬四千智惠。何以故。爲世有八萬四千塵勞。若無塵勞、般若常在、不離自性。悟此法者、即是無念・無億・無著。莫去誰妄、即自是真如性。用知惠觀

なれば、即ち般若が生ず。世人は愚迷にして、般若を見ず。口には般若を説けども、心中は常に愚にして、自ら言う、我れは般若を修す、と。念念に空を説いて、眞空を識らず。般若は形相無し、智慧の心即ち是れなり。若し是の如きの解を作さば、即ち般若の智と名づく。何をか波羅蜜と名づくる。此れは是れ西國の語にして、漢には到彼岸と言う。義を解れば生滅を離れ、境に著すれば生滅起る。水の波浪有るを、即ち是れ此岸に於てするが如し。境を離るれば生滅無く、水の常に通流するが如し。即ち名づけて彼岸と爲し、故に波羅蜜と號ぶ。「善知識よ、迷人は口に念じて、念ずるの時に當つて、妄有り非有り。念念に若し行ぜば、是れを眞性と名づく。此の法を悟るは、是れ般若の法なり。此の行を修するは、是れ般若の行なり。修せずんば即ち凡なるも、一念も修行すれば、法身と佛と等し。「善知識よ、煩惱は即ち是れ菩提なり。前念迷えば即ち凡、後念悟れば即ち佛なり。前念境に著すれば即ち煩惱、後念境を離るれば即ち菩提なり。「善知識よ、摩訶般若波羅蜜は、最尊・最上・最第一なり。住すること無く、往來すること無し。三世の諸佛は皆な中より出ず。大智慧を用つて、五蘊の煩惱塵勞を打破す。若し人の修行すれば、定んで佛道を成じて、三毒を變じて戒定惠と爲す」。

(36) 善知識、我此法門、從一般若、生八萬四千智惠。何以故。爲世人有八萬四千塵勞。若無塵勞、智惠常在、不離自性。悟此法者、即是無念・無億・無著・無妄。莫起誰妄。用

照、於一切法、不取不捨、即見性成佛道。

*在_レ現(興)(寬)。*憶_レ境(底)。*無妄_レナシ(興)(寬)。*莫_レ不(興)(寬)。*見_レナシ(底)。

「善知識よ、我が此の法門は、八萬四千の智恵を従つ。何を以ての故に。世に八萬四千の塵勞有るが爲なり。若し塵勞無ければ、般若は常に在りて、自性を離れず。此の法を悟る者は、即ち是れ無念・無憶・無著なり。誑妄を起すこと莫れ、即ち自ら是れ眞如の性なり。智恵を用つて觀照し、一切法に於て、取らず捨てず、即ち見性して佛道を成ず」。

自眞如性、以智恵觀照、於一切法、不取不捨、即是見性成佛道。

「善知識よ、我が此の法門は、一の般若より八萬四千の智恵を生ず。何を以ての故に。世人に八萬四千の塵勞有るが爲なり。若し塵勞無ければ、智恵は常に在りて、自性を離れず。此の法を悟る者は、即ち是れ無念・無憶・無著・無妄なり。誑妄を起すこと莫れ。自らの眞如の性を用いて、智恵を以て觀照し、一切の法に於て、取らず捨てず、即ち是れ見性して佛道を成ず」。

「善知識よ、我が此の法門は、一の般若より八萬四千の智恵を生ず。何を以ての故に。世人に八萬四千の塵勞有るが爲なり。若し塵勞無ければ、智恵は常に在りて、自性を離れず。此の法を悟る者は、即ち是れ無念・無憶・無著・無妄なり。誑妄を起すこと莫れ。自らの眞如の性を用いて、智恵を以て觀照し、一切の法に於て、取らず捨てず、即ち是れ見性して佛道を成ず」。

四一 金剛經の功德

(30) 善知識、若欲入甚深法界、入般若三昧者、直修般若波羅蜜行。但持金剛般若波羅蜜經一卷、即得見性入般若三昧。

當知此人功德無量。經中分名讚嘆、不能具說。此是最上乘法、爲大智上根人說。少根智人、若聞法、心不生信。何以故。譬如大龍。若下大雨、雨衣閣浮提、如漂草葉。若下大雨、雨放大海、不增不減。若大乘者、聞說金剛經、心開悟解。故知本性自有般若之智、自用知惠觀照、不假文字。譬如其雨水、不從無有。元是龍王於江海中、將身引此水、令一切衆生、一切草木、一切有情無情、悉皆像潤。諸水衆流、却入大海、海納衆水、合爲一體。衆生本性、般若之智、亦復如是。

(37) 善知識、若欲入甚深法界、入般若三昧者、須修般若行、持誦金剛般若經、即得見性。當知此功德無量無邊。經中分明讚歎、不能具說。此法門是最上乘、爲大智人說、爲上根人說。小根小智人聞、心生不信。何以故。譬如大龍下雨於閣浮提、漂流棗葉。若雨大海、不增不減。若大乘人、若最上乘人、聞說金剛經、心開悟解。故知本性自有般若之智、自用智惠常觀照故、不假文字。譬如雨水、不從天有。元是龍王於江海中、將身攬上、令一切衆生、一切草木、有情無情、悉皆蒙潤。諸水衆流、却入大海、合爲一體。衆生本性、般若之智、亦復如是。

當知此人功德無量。經中分名讚嘆、不能具說。此是最上乘法、爲大智上根人說。少根智人、若聞法、心不生信。何以故。譬如大龍。若下大雨、雨衣閣浮提、如漂草葉。若下大雨、雨放大海、不增不減。若大乘者、聞說金剛經、心開悟解。故知本性自有般若之智、自用知惠觀照、不假文字。譬如其雨水、不從無有。元是龍王於江海中、將身引此水、令一切衆生、一切草木、一切有情無情、悉皆像潤。諸水衆流、却入大海、海納衆水、合爲一體。衆生本性、般若之智、亦復如是。

*入_レ及(興)(寬)。*提_レ提城邑聚落悉皆(興)(寬)。*流_レ流如漂(興)(寬)。*觀_レ勸(寬)。*王於江海中將身攬上_レ能興致(興)(寬)。
*攬_レ攬(金)(大)。*復_レ須(大)。

「善知識よ、若し甚深法界に入り、般若三昧に入らんと欲せば、直に般若波羅蜜の行を修せよ。但し『金剛般若波羅蜜經』一卷を持せば、即ち見性することを得て、般若三昧に入らん。當に知るべし、此の人の功德は無量なることを。經中に分明に讚歎す、具さに説くこと能わず。此は是れ最上乘の法なり、大智上根の人の爲に説く。少根智の人は、若し法を聞くも、心に信を生ぜず。何を以ての故に。譬えば大龍の如し。若し大雨を下して、閻浮提に雨ふらせば、草葉を漂すが如くならん。若し大雨を下して、大海に雨ふらせば、不増不減なり。若し大乘の者は、『金剛經』を聞説かば、心開けて悟解せん。故に知んぬ、本性は自ずから般若の智有り、自ら智恵を用つて觀照して、文字を假らざることを。譬えば其の雨水の如きも、天よりして有るにあらず。元より是れ龍王の江海中に於て、身を將つて此の水を引き、一切の衆生、一切の草木、一切の有情無情をして、悉く皆な潤いを蒙らしむるなり。諸水衆流は却つて大海に入るも、海は衆水を納れて合して一體と爲る。衆生の本性の般若の智も、亦復た是の如し」。

四二 小根の人と大智の人

(31) 少根(小)之人、聞説此頓教、猶如大地草木根性自少者、若被大雨一沃、悉皆自到、不能增長。少根之人、亦復如是。有般若之智(衍字)之、與大智之人、亦無差別。因何聞法即不悟。緣邪見障重、煩惱根深。猶如大雲蓋覆於日、不得風吹、日無能現。般若之智、亦無大小、爲一切衆生、自有迷心、外修覓佛、來悟自性、即是小根人。聞其頓教、不信外修。但於自

「善知識よ、若し甚深法界に入り、般若三昧に入らんと欲せば、須らく般若の行を修し、『金剛般若經』を持誦して、即ち見性することを得べし。當に知るべし、此の功德は無量無邊なることを。經中に分明に讚歎す、具さに説くこと能わず。此の法門は、是れ最上乘にして、大智の人の爲に説き、上根の人の爲に説く。小根小智の人聞かば、心に不信を生ぜん。何を以ての故に。譬えば大龍の雨を閻浮提に下せば、衆葉を漂流するが如し。若し大海に雨ふらせば、不増不減なり。若しくは大乘の人、若しくは最上乘の人は、『金剛經』を聞説かば、心開けて悟解せん。故に知んぬ、本性には自ずから般若の智有つて、自ら智恵を用つて常に觀照するが故に、文字を假らざることを。譬えば雨水の如きも、天よりして有るにあらず。元より是れ龍王の江海中に於て、身を將つて上を攬どり、一切の衆生、一切の草木、有情無情をして、悉く皆な潤いを蒙らしむるなり。諸水衆流は、却つて大海に入つて合して一體と爲る。衆生の本性の般若の智も、亦復た是の如し」。

(38) 善知識、小根之人、聞此頓教、猶如草木根性自小、若被大雨、皆悉自到、不能增長。小根之人、亦復如是。還有般若之智、與大智之人、更無差別。因何聞法、亦有悟不悟。緣邪見障重、煩惱根深。猶如大雲覆蓋於日、不得風吹、日光不能現。般若之智、亦無大小、爲一切衆生自心迷悟不同、迷心外見、修行覓佛、未悟自性、即是小根。若聞頓教、不執外修。

心、令自本性常起正見、煩惱塵勞衆生、當時盡悟。猶如大海納於衆流、小水大水合爲一體。即是見性。内外不住、來去自由。能除執心、通達無礙。心修此行、即與般若波羅蜜經、本無差別。

* 皆悉_レ悉皆(興)(寬)。* 亦復如是_レナシ(金)(大)。* 還_レ亦(金)(大)_レ元(興)(寬)。* 之_レナシ(興)(寬)。* 亦有悟不悟_レ不自開悟(興)(寬)。* 若聞頓教_レ聞其頓法(金)(大)。_レ若開悟頓教(興)(寬)。* 邪見_レナシ(興)(寬)。* 溢_レ染(興)(寬)。

「小根の人の此の頓教を聞説くは、猶お大地の草木の根性の自ずから小なる者、若し大雨の一沃するを被れば、悉く皆な自ら倒れて、増長すること能わざるが如し。小根の人も、亦復た是の如し。般若の智有るは、大智の人と亦た差別無し、何に因つてか法を聞いて即ち悟らざる。邪見の障り重く、煩惱の根の深きに縁る。猶お大雲の日を蓋覆して、風の吹くことを得ずんば、日は能く現われること無きが如し。般若の智も、亦た大小無きも、一切衆生の自ら迷心有るが爲に、外に修して佛を覓めて、未だ自性を悟らず、即ち是れ小根の人なり。其の頓教を聞くも、信ぜずして外に修す。但し自心に於て、自らの本性をして常に正見を起さしめば、煩惱塵勞の衆生も、當時に盡く悟らん。猶お大海の衆流を納れて、小水大水合して一體と爲るが如し。即ち是れ見性なり」。

「内外に住せざれば、來去自由なり。能く執心を除かば、通達無礙なり。心に此の行を修せば、即ち『般若波羅蜜經』と本より差別無し」。

四三 萬法は自心にあり

但於自心、常起正見、邪見煩惱塵勞、常不能溢、即是見性。善知識、内外不住、去來自由。能除執心、通達無礙。能修此行、與般若經、本無差別。

「善知識よ、小根の人の此の頓教を聞説くは、猶お草木の根性の自ずから小なるもの、若し大雨を被れば、皆な悉く自ら倒れて、増長すること能わざるが如し。小根の人も、亦復た是の如し。還た般若の智有るは、大智の人と更に差別無し。何に因つてか法を聞いて、亦た悟と不悟と有らん。邪見の障り重く、煩惱の根の深きに縁る。猶お大雲の日を蓋覆して、風の吹くことを得ずんば、日光の現われざるが如し。般若の智も、亦た大小無きも、一切衆生が自心に迷悟すること同じからざるが爲に、迷心は外に見て、修行して佛を覓めて、未だ自性を悟らず、即ち是れ小根なり。若し頓教を聞かば、外修に執われず。但し自心に於て常に正見を起せば、邪見煩惱塵勞も常に溢れること能わず、即ち是れ見性なり」。

「善知識よ、内外に住せざれば、去來自由なり。能く執心を除かば、通達無礙なり。能く此の行を修せば、『般若經』と本より差別無し」。

(32) 一切經書及文字、小大二乘、十二部經、皆因(人)

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

(39) 善知識、一切經書、及諸文字、大小二乘、十二部經、

七七

置。因智惠性故、故(衍字)然能建立。我(衍字)若無智人、一切萬法、本(元)無不有。故知萬法本從人興、一切經書、因人說有。緣在人中(其)有(衍字)有愚有智、愚爲少故、智爲大人。問迷(迷人問)人於智者、智人與愚人說法、令使愚者悟解深開。迷人若悟心開、與大智人無別。故知不悟即是佛是衆生、一念若悟、即衆生不是佛。故知一切萬法、盡在自身心中。何不從於自心頓現眞如本性。菩薩戒經云、我本願(源)自性清淨。識心見性、自成佛道。即時豁然、還得本心。

* 二||一(金)。* 小||小人(興)(寬)。(大)ハ横ニ「人」ト「イ本」ヲ示ス。* 故||ナシ(興)(寬)。* 與||爲(金)(大)。* 愚||「愚」以下三丁ハ惠玉ノ補寫(金)。* 若悟||忽悟解(興)(寬)。* 源||元(興)(寬)。* 識||若識自(興)(寬)。* 即||淨名經云即(興)(寬)。

「一切の經書及び文字、小大の二乘、十二部經も、皆な人に因つて置く。智惠の性に因るが故に、然して能く建立す。若し世人無くんば、一切の萬法は本元より有らず。故に知る、萬法は本より人に従つて興り、一切の經書は人の説くに因つて有ることを。其の人の中に愚有り智有るに縁つて、愚は小と爲る故に、智は大人と爲る。迷人は智者に問い、智人は愚人の與(たゝ)に法を説き、愚者をして悟解して心開かしむ。迷人も若し悟りて心開けば、大智の人と別なること無し。故に知る、悟らざれば即(すなわ)ち佛も是れ衆生なり、一念若し悟れば即ち衆生も亦た是れ佛なることを。故に知る、一切萬法は盡く自身の心中に在ることを。何ぞ自心より、頓に眞如の本性を現ぜざる。『菩薩戒經』に云く、『我が本源は自性清淨なり』。心を識り見性せば、自ら佛道を成ず。即(そ)の時に豁然として還つて本の心を得たりき、と」。

皆因人置。因智惠性、方能建立。若無世人、一切萬法、本自不有。故知萬法本因人興、一切經書、因人說有。緣其人中有愚有智、愚爲小故、智爲大人。愚者問於智人、智者與愚人說法、令其悟解心開。愚人若悟心開、即與智人無別。善知識、不悟即佛是衆生、一念悟時衆生是佛。故知萬法盡在自心。何不從自心中頓見眞如本性。菩薩戒經云、我本源自性清淨。識心見性、皆成佛道。即時豁然、還得本心。

「善知識よ、一切の經書、及び諸々の文字、大小の二乘、十二部經も、皆な人に因つて置く。智惠の性に因つて、方に能く建立す。若し世人無くんば、一切の萬法は本元より有らず。故に知る、萬法は本より人に因つて興り、一切の經書は人の説くに因つて有ることを。其の人の中に愚有り智有るに縁つて、愚は小と爲る故に、智は大人と爲る。愚者は智人に問い、智者は愚人の與(たゝ)に法を説き、其れをして悟解して心開かしむ。愚人も若し悟りて心開けば、即ち智人と別なること無し。善知識よ、悟らざれば即ち佛も是れ衆生なり、一念悟る時は、衆生も是れ佛なり。故に知る、萬法は盡く自心に在ることを。何ぞ自心の中より、頓に眞如の本性を見ざる。『菩薩戒經』に云く、『我が本源は自性清淨なり』。心を識り見性せば、皆な佛道を成ず。即(そ)の時に豁然として還つて本の心を得たりき、と」。

四四 頓悟見性の教え

(33) 善知識、我於忍和尙處、一聞言下大悟、頓見真如本性。是故汝教法、流行後代、今學道者頓悟菩提。各自觀心、令自本性頓悟。若(不)能自悟者、須覓大善知識亦道見性。何名大善知識(識)。解最上乘法、直是正路、是大善知識。是大因緣、所爲化道令得見佛。一切善法、皆因大善知識能發起故。三世諸佛、十二部經、云在人性中、本自具有。不能自性悟、須得善知識示道見性。若自悟者、不假外善知識。若取外求善知識、望得解說、無有是處。識自心內善知識、即得解(脫)。若自心邪迷、妄念顛倒、外善知識、即有教授汝、若不得自悟。當起般若觀照。剎那間妄念俱滅。即是自真正善知識、一悟即知佛也。自性心地、以智慧觀照、內外名徹、識自本心。若識本心、即是解脫。既得解脫、即是般若三昧。悟般若三昧、即是無念。何名無念。無念法者、見一切法、不著一切法、遍一切處、不著一切處。常淨自性、使六賊從六門走出、於六塵中、不離不染、來去自由。即是般若三昧、自在解脫、名無念行。莫百物不思。當令念絕、即是法縛、即名邊見。悟無念法者、萬法盡通。悟無念法者、見諸佛境界。悟無念頓法者、至佛位地。

(40) 善知識、我於忍和尙處、一聞言下便悟、頓見真如本性。是以將此教法流行、令學道者、頓悟菩提。各自觀心、自見本性。若自不悟、須覓大善知識、解最上乘法者、直示正路。是善知識有大因緣、所謂化導令得見性。一切善法、因善知識能發起故。三世諸佛、十二部經、在人性中、本自具有。不能自悟、須求善知識示導方見。若自悟者、不假外善知識。望得解脫、無有是處。自心內知識、自悟即是。自心若起邪迷、妄念顛倒、外善知識、雖有教授、救不可得。自心若正起般若觀照、一剎那間、妄念俱滅。若識自性、一悟即至佛地。善知識、智慧觀照、內外明徹、識自本心。若識本心、即本解脫。若得解脫、即是般若三昧、即是無念。何名無念。若見一切法、心不染著、是爲無念。用即遍一切處、亦不著一切處。但淨本心、使六識從六門走出、於六塵中、無染無雜、來去自由、通同無滯。即是般若三昧、自在解脫、名無念行。莫百物不思。當令念絕、即是法縛、即名邊見。善知識、悟無念法者、萬法盡通。悟無念法者、見諸佛境界。悟無念法者、至佛位地。

* 眞如||ナシ(金)。* 外||外求若須要(興)(寬)。* 脫||脫者(興)(寬)。* 處||處何以故(興)(寬)。* 內||內有(興)(寬)。* 即是自心||ナシ(興)(寬)* 自||自若(大)。* 自心若正起||若起正眞(興)(寬)。* 一悟||ナシ(金)。* 心||心若識本心(金)。* 本||求(興)(寬)。(興)ハ

頭注ニ「本」トアル。*若得解脫(底)。*遍(徧)徧(金)。*莫(若)興(寬)。*位地(地位)(金)。

「善知識よ、我れ忍和尚の處に於て、一たび聞いて言下に大悟し、頓に眞如の本性を見たり。是の故に此の教法を後代に流行して、學道の者をして頓に菩提を悟らしむ。各自に觀心して、自らの本性を頓悟せしめよ。若し自ら悟ること能わざる者は、須らく大善知識の示導を覓めて見性すべし。何をか大善知識と名づくる。最上乘の法を解り、正路を直示す、是れ大善知識なり。是れ大因縁あり、所謂る化導して佛を見ることを得しむ。一切の善法は、皆な大善知識に因つて能く發起するが故なり。三世の諸佛、十二部經も、亦た人の性中に在りて、本自より具有す。自性の悟ること能わずんば、須らく善知識の示導を得て見性すべし。若し自ら悟る者は、外の善知識を假らず。若し外に善知識を求むることを取りて、解脫を得んと望まば、是の處有ること無し。自心の内の善知識を識れば、即ち解脫することを得ん。若し自心邪迷し、妄念顛倒せば、外の善知識の即ち汝を教授すること有るも、自悟するを得ざらん。當に般若を起して觀照すべし。刹那の間に妄念は俱に滅せん。即ち是れ自らの眞正の善知識、一悟して即ち佛を知るなり。」「自性の心地は、智恵を以て觀照して、内外明徹なれば、自らの本心を識る。若し本心を識らば、即ち是れ解脫す。既に解脫を得れば、即ち是れ般若三昧なり。般若三昧を悟れば、即ち是れ無念なり。何をか無念と名づくる。無念の法は、一切法を見て、一切法に著せず、一切處に遍くして、一切處に著せず。常に自性を淨めて、六賊を六門より走り出でしめ、六塵の中に於て、離れず染まず、來去自由なる。即ち是れ般若三昧にして、自在に解脫するを、無念の行と名づく。百物思わざること莫れ。

「善知識よ、我れ忍和尚の處に於て、一たび聞いて言下に便ち悟り、頓に眞如の本性を見たり。是れを以て此の教法を將つて流行して、學道の者をして頓に菩提を悟らしむ。各自に觀心して、自ら本性を見よ。若し自ら悟らずんば、須らく大善知識の最上乘法を解る者の正路を直示するを覓むべし。是れ善知識は大因縁あり、所謂る化導して見性を得しむ。一切の善法は、善知識に因つて能く發起するが故なり。三世の諸佛、十二部經は、人の性中に在りて、本自より具有す。自ら悟ること能わずんば、須らく善知識の示導を求めて、方めて見るべし。若し自ら悟る者は、外の善知識を假らず。解脫を得んと望むも、是の處有ること無し。自心の内の知識、自ら悟れば即ち是なり。自心の若し邪迷を起こして、妄念顛倒せば、外の善知識の教授すること有りと雖も、救うこと得べからず。自心の若し正しく般若を起こして觀照せば、一刹那の間に、妄念は俱に滅す。若し自性を識らば、一悟して即ち佛地に至る。」「善知識よ、智恵もて觀照して、内外明徹なれば、自らの本心を識る。若し本心を識らば、即ち本より解脫す。若し解脫を得れば、即ち是れ般若三昧、即ち是れ無念なり。何をか無念と名づくる。若し一切法を見て、心染著せざる。是れを無念と爲す。用は即ち一切處に遍く、亦た一切處に著せず。但だ本心を淨めて、六識をして六門より走り出でしめ、六塵の中に於て、染無く雜無く、來去自由にして、通同して滯ること無し。即ち是れ般若三昧にして、自在に解脫するを、無念の行と名づく。百物思わざること莫れ。當に念をして絶せしめば、即ち是れ法縛にして、即ち邊見と名づく。」「善知識よ、無念の法を悟る者は、萬法盡

當に念をして絶せしめば、即ち是れ法縛にして、即ち邊見と名づく。」「無念の法を悟る者は、萬法盡く通ず。無念の法を悟る者は、諸佛の境界を見る。無念の頓法を悟る者は、佛位の地に至る」。

四五 頓教を護持すべきこと

(34) 善知識、後代得^(善)悟法者、常見吾法身、不離汝左右。善知識、將此頓教法門、同見同行、發願受持、如是佛故、終身受持而不退者、欲入聖位。然須^(傳)縛受時、從上已來、嘿然而付於法。發大誓願、不退菩提、即須分付。若不同見解、無有志願、在在處處、勿妄宣傳。損彼前人、究竟無益^(益)。若遇^(愚)人不解、謾此法門、百劫萬劫千生、斷佛種性。

* 同||於同(興)(寬)。* 受持||ナシ(興)(寬)。* 授||受(底)(大)(興)(寬)。* 已||迤(底)||以(金)(興)(寬)。* 愚||愚人(興)(寬)。

「善知識よ、後代に吾が法を得ん者は、常に吾が法身の汝が左右を離れざることを見ん」。「善知識よ、此の頓教の法門を將つて、同じく見、同じく行じて、發願受持して、佛に事うるが如くするが故に、身を終るまで受持して退かざる者は、聖位に入らんと欲す。然れば、須らく傳授する時は、從上已來、嘿然として法を付すべし。大誓願を發して、菩提を退かさざれば、即ち須らく分付すべし。若し見解を同じくせず、志願有ること無くんば、在在處處に妄に宣傳すること勿かれ。彼の前人を損じて、究竟^(くぎょう)して益無し。若し愚人の解せずして、此の法門を謾^(まん)せば、百劫萬劫千生に、佛の種性を斷せんことを」。

く通ず。無念の法を悟る者は、諸佛の境界を見る。無念の法を悟る者は、佛位の地に至る」。

(41) 善知識、後代得吾法者、常見吾法身、不離汝左右。善知識、將此頓教法門、同見同行、發願受持、如事佛故、終身受持而不退者、欲入聖位。然須^(傳)傳授、從上已來、默傳分付、不得匿其正法。若不同見同行、在別法中、不得傳付。損彼前人、究竟無益。恐愚^(愚)不解、謗此法門、百劫千生、斷佛種性。

「善知識よ、後代に吾が法を得ん者は、常に吾が法身の汝が左右を離れざることを見ん」。「善知識よ、此の頓教の法門を將つて、同じく見、同じく行じて、發願^(ほつがん)受持して、佛に事うるが如くするが故に、身を終るまで受持して退かざる者は、聖位に入らんと欲す。然れば、須らく傳授して、從上已來、默傳分付して、其の正法を匿^(かく)すことを得ざるべし。若し同じく見、同じく行ぜずして、別法の中に在らば、傳付を得ず。彼の前人を損じて、究竟して益無し。恐らくは愚かなるものの解せずして、此の法門を謗^(びやう)じ、百劫千生に、佛の種性を斷せんことを」。

四六 無相滅罪頌

(35) 大師言、善知識、聽悟說無相訟、令汝名者罪滅。亦名滅罪頌。頌曰、

愚人修福不修道、謂言修福而是(道)。

布施供養福無邊、心中三葉元來在。

若將修福欲滅罪、後世得福罪無造。

若解向心除罪緣、各自世中真懺悔。

若悟大乘真懺悔、除邪行正造無罪。

學道之人能自觀、即與悟人同一例。

大師令傳此頓教、願學之人同一體。

若欲當來覓本身、三毒惡緣心中洗。

努力修道莫悠悠、忽然虛度一世休。

若遇大乘頓教法、虔誠合掌志心求。

大師說法了。韋使君官寮僧衆道俗、讚言無盡、昔所未聞。

*汝等||若能(興)(寬)。*名||各(金)(大)(興)(寬)。*例||類(興)(寬)。*志(金)(大)。*員||僚(金)(大)。*皆||ナシ(底)。*哉||哉希有(金)(大)。

大師言く、「善知識よ、吾が無相頌を説くを聴け、汝が迷者の罪をして滅せしめん。亦た滅罪頌と名づく」。頌に曰く、

愚人は福を修して道を修せず、謂いて福を修して而も是れ道なりと言ふ。

(42) 善知識、吾有一無相頌。汝等誦取、言下令汝迷罪消滅。頌曰、

迷人修福不修道、只言修福便是道。

布施供養福無邊、心中三惡元來造。

擬將修福欲滅罪、後世得福罪還在。

但向心中除罪緣、名自性中真懺悔。

忽悟大乘真懺悔、除邪行正即無罪。

學道常於自性觀、即與諸佛同一例。

*五祖唯傳此頓法、普願見性同一體。

若欲當來覓法身、離諸法相心中洗。

努力自見莫悠悠、後念忽絕一世休。

若悟大乘得見性、虔恭合掌至心求。

師言、今於大梵寺中、説此頓教。普願法界衆生、於此言下、

見性成佛。師說法了。韋使君與官員道俗、一時作禮、無不悟

者。皆歎善哉、何期嶺南有佛出世。

「善知識よ、吾れに一の無相頌有り。汝等、誦取せば、言下に汝が迷罪をして消滅せしめん」。頌に曰く、

迷人は福を修して道を修せず、只だ言ふ、福を修するは便ち是れ道なりと。

布施、供養して福無邊なるも、心中の三業は元來在り。

若し福を修するを將て罪を滅せんと欲せば、後世に福を得るとき、罪も亦た造らん。

若し解く心に向つて罪縁を除けば、自性の中の眞の懺悔と名づく。

若し大乘を悟らば眞の懺悔なり、邪を除き正を行じて無罪に造る。

學道の人能く自ら觀ぜば、即ち悟人と同一例なり。

大師は此の頓教を傳えしむ、願わくは之を學ぶ人の同一體ならんことを。

若し當來に本身を覓めんと欲せば、三毒の惡縁、心中を洗げ。

努力して道を修して、悠悠たること莫れ、忽然虚しく度れば一世休す。

若し大乘頓教の法に遇わば、虔誠に合掌して志心に求めよ。大師、法を説き了る。韋使君、官寮、僧衆、道俗は讚言して盡

くる無く、「昔未だ聞かざる所なり」。

四七 達磨無功德の教え

(36) 使君禮拜自言、和尚說法、實不思議。弟子當有少疑、

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

布施、供養して福無邊なるも、心中の三惡は元來造る。

福を修するを將て罪を滅せんと欲すと擬するも、後世に福を得るとき、罪も還た在り。

但し心中に向つて罪縁を除けば、自性の中の眞の懺悔と名づく。

忽し大乘を悟らば眞の懺悔なり、邪を除き正を行じて即ち罪無し。

學道は常に自性を觀ぜよ、即ち諸佛と同一例なり。

五祖は唯だ此の頓法を傳う、普く願わくは見性して同一體ならんことを。

若し當來に法身を覓めんと欲せば、諸法の相を離れて心中を洗げ。

努力して自ら見て悠悠たること莫れ、後念忽ち絶すれば一世休す。

若し大乘を悟つて見性を得んとならば、虔恭に合掌して至心に求めよ。

師言く、「今、大梵寺中に於て、此の頓教を説く。普く願わく

は法界の衆生、此の言下に於て見性成佛せんことを」。師の説法了る。韋使君は官員道俗と與に一時に禮を作し、悟らざる者無し。皆な歎ずらく、「善い哉。何ぞ期せん、嶺南に佛の出世有らんとは」。

(43) 八、示西方相狀門。△武帝問功德附。▽。

爾時韋使君、再肅容儀禮拜問曰、弟子聞和尚說法、實不可

欲聞和尚。望(衍字)和尙、大慈大悲爲弟子說。大師言、有(疑)疑即聞、何須再三。使君聞、(和尙所說)法、可不(衍字)不是西國弟一祖達磨(帝)祖師宗旨。大師言、是。弟子見說、達磨大師伐梁武帝、(帝)問達磨、朕一生未來、造寺布施供養、有(衍字)有功德否。達磨答言、並無功德。武帝惆悵。遂遣達磨出境。未審此言、請和尚說。六祖言、實無功德。使君朕(衍字)勿疑達磨大師言。武帝著邪道、不識正法。使君問、何以無功德。和尚言、造寺布施供養、只是修福。不可將福以爲功德。(功德)在法身、非在於福田。自法性有功德。(見性是功)、平直是德。(內見)佛性、外行恭敬。若輕一切人、悟我不斷、即自無功德。自性虛妄、法身無功德。念念德行、平等真心、德即不輕、常行於敬。自修身即功、自修身(衍字)心即德。功德自心作、福與功德別。武帝不識正理、非祖大師有過。

思議。今有少疑、欲問和尚。願大慈悲、特爲解說。師曰、有疑即問、何須再三。使君曰、和尚所說、可不是達磨大師宗旨。師言、是。使君曰、弟子聞說、達磨初梁朝武帝問、朕一生已來、造寺供僧、布施設齋、有何功德。達磨言、實無功德。武帝悵悵、不稱本情。遂令達磨出境。弟子未達此理。願和尚爲說、達磨意旨如何。師曰、實無功德。勿疑先聖之言。武帝心邪、不知正法。造寺供養布施設齋、名爲求福。不可將福便爲功德。功德在法身中、不在修福。師曰、見性是功、平直是德。念念無滯、常見本性、眞實妙用、名爲功德。外行禮敬是功、內心謙下是德。自性建立萬法是功、心體離念是德。不離自性是功、應用無染是德。若覓功德法身、但依此作、是眞功德。若修功德之人、心即不輕、常行普敬也。師曰、心常輕人、吾我不斷、即自無功。自性虛妄不實、即自無德。無功德之人、爲吾我自大、常輕一切故。善知識、念念無聞是功、心行平直是德。自修身是功、自修性是德。德即不輕、常行普敬。韋使君默然作觀。師言、善知識、功德須自性內見、不是布施供養之所求也。是以福德與功德別。武帝不識理、非我祖師有過。使君頂禮、願爲弟子。

示||問答功德及(興)(寬)。^武帝問功德附||ナシ(興)(寬)。*使||氏(底)。*使君||韋公(興)(寬)。*旨||旨乎(興)(寬)。*言||曰(興)(寬)。*使君曰||ナシ(底)||公曰(興)(寬)。*說||ナシ(興)(寬)。*梁朝武帝問||化梁武帝帝問云(興)(寬)。*已來||進來(底)||ナシ(興)(寬)。*齋||齋(金)(大)。以下同。*快||怛(金)(大)。*旨||言(金)。*曰||言(金)(大)。*將||得(金)。*功德||ナシ(底)(金)。*師||師又(興)(寬)。*曰||言(大)。*直||等(興)(寬)。*禮敬||於禮(興)(寬)。*念||心念(底)。*心||ナシ(金)。*無功德之人||ナシ(興)(寬)。*德即不輕常行普敬韋使君默然作觀師言||ナシ(興)(寬)。*須||源(底)。*理||眞理(興)(寬)。*有||人在(金)(大)。

*使君頂禮願爲弟子ニナン(興)(寛)

使君は禮拜して自ら言く、「和尚の説法は、實に不思議なり。弟子は當に少しく疑有り、和尚に問わんと欲せんとす。望むらくは和尚が大慈悲もて、弟子の爲に説きたまえ」。大師言く、「疑有らば即ち問え、何ぞ再三することを須いん」。使君問う、「和尚が説く所の法は、可に是れ西國第一祖達磨大師の宗旨にあらずや」。大師言く、「是なり」。「弟子は見説く、達磨大師が梁の武帝を化せしとき、帝は達磨に問う、『朕は一生已來、寺を造り布施供養す、功德有りや』。達磨答えて言く、『並な功德無し』。武帝惆悵たり。遂に達磨をして境を出ださしむ、と。未審し、此の言、請う和尚の説かんとを」。六祖言く、「實に功德無し。使君よ、達磨大師の言を疑うこと勿れ。武帝は邪道に著して正法を識らざるなり」。使君問う、「何を以てか功德無き」。和尚言く、「寺を造り布施供養するは、只だ是れ修福なるのみ。福を將つて功德と以爲うべからず。功德は法身に在り、福田に在るに非ず。自らの法性に功德有り。見性は是れ功、平直は是れ徳なり。内に佛性を見、外に恭敬を行ず。若し一切人を輕んじて、吾我斷ぜざれば、即ち自ら功德無し。自性虚妄にして、法身に功德無ければなり」。「念念に德行して、平等直心なれば、徳は即ち輕んぜず、常に敬を行ずるなり。自ら身を修するは即ち功、自ら心を修するは即ち徳なり」。「功德は自心に作る、福は功德と別なり。武帝は正理を識らず、祖大師に過有るには非ず」。

八、西方の相狀を示す門。△武帝、功德を問うを附す。▽。

爾の時、韋使君は再び容儀を肅えて禮拜して問うて曰く、「弟子は和尚の説法を聞いて、實に不可思議なり。今、少しく疑有り、和尚に問わんと欲す。願わくは大慈悲もて、特に與に解説したまえ」。師曰く、「疑有らば即ち問え、何ぞ再三することを須いん」。使君曰く、「和尚の所説は、可に是れ達磨大師の宗旨にあらずや」。師言く、「是なり」。使君曰く、「弟子は聞説く、達磨、初め梁朝の武帝問う、『朕は一生已來、寺を造り僧に供し、布施し齋を設く、何の功德か有る』。達磨言く、『實に功德無し』。武帝は悵快し、本情に稱わず。遂に達磨をして境を出ださしむ、と。弟子は未だ此の理に達せず。願わくは和尚、爲に説かんとを。達磨の意旨や如何」。師曰く、「實に功德無し。先聖の言を疑うこと勿れ。武帝は心邪まにして、正法を知らず。寺を造り供養し、布施し齋を設く、名づけて福を求むと爲す。福を將つて便ち功德と爲すべからず。功德は法身の中に在り、修福に在らず」。師曰く、「見性は是れ功、平直は是れ徳なり。念念に滯ること無く、常に本性を見て、眞實に妙用するを、名づけて功德と爲す。外に禮敬を行ずるは是れ功、内に謙下を心とするは是れ徳なり。自性の萬法を建立するは是れ功、心體の念を離るるは是れ徳なり。自性を離れざるは是れ功、應用して染すること無きは是れ徳なり。若し功德法身を覓めば、但だ此れに依つて作せ、是れ眞の功德なり。若し功德を修する人ならば、心に即ち輕んぜず、常に普敬を行ずるなり」。師曰く、「心に常に人を輕んじて、吾我斷ぜざれば、即ち自ら功無し。自性虚妄にして不實なれば、即ち自ら徳無し。無

功德の人、吾我自大にして、常に一切を輕んずるが爲の故なり。」「善知識よ、念念に無閑なるは是れ功、心行の平直なるは是れ徳なり。自ら身を修するは是れ功、自ら性を修するは是れ徳なり。徳は即ち輕んぜず、常に普敬を行ずるなり。韋使君默然として觀を作す。師言く、「善知識よ、功德は須らく自性の内に見るべし、是れ布施供養の求むる所にあらず。是を以て、福德は功德と別なり。武帝は理を識らず、我が祖師に過有るには非ず」。使君頂禮して、願つて弟子と爲る。

四八 淨土の所在

(37) 使君禮拜又問、弟子見僧(衍字)道俗、常念阿彌大佛(陀)、願往生西方。請和尚說、徳生彼否。望爲破疑。大師言、使君聽、惠能與說。世尊在舍衛國、說西方引化。經文分明、去此不遠。(說遠)只爲下根、說近說遠只緣上智。人自兩重(種)、法無不(兩)。(迷)名悟有殊、見有遲疾。迷人念佛生彼、悟者自淨其心。所以佛言、隨其心淨、則佛土淨。使君、東方但淨心無罪、西方心不淨有愆。迷人願生東方(方)西者、(悟人)所在處、並皆一種。心但無不淨、西方去此不遠。心起不淨之心、念佛往生難到。除(十)惡即行十萬、無八邪即過八千。但行真心(直)、到如禪指(禪)。使君、但行十善、何須更願往生。不斷十惡之心、何佛即來迎請。若悟無生頓法、見西方只在刹那(那)。不悟頓教大乘、念佛往生路遙、如何得達。六祖言、惠能與使君、移西方刹那間、日前便見。使君願見否。使君禮拜、若此得見、何須往生。願和尚慈

(44) 又問、弟子常見僧俗、念阿彌陀經、願生西方。請和尚說、得生彼不。願爲破疑。師言、使君善聽、某甲與說。世尊在舍衛城中、說西方引化。經文分明、去此不遠。若論相說里數、即有十萬八千。若說身中、十惡八邪便是。說遠只爲下根、說近爲其上智。人有兩種、法無兩般。迷悟有殊、見有遲疾。迷人念佛生彼、悟人自淨其心。所以佛言、隨其心淨、即佛土淨。師言、東方人、但淨心無罪、西方人、心不淨有愆。東方人造罪、念佛求生西方。西方人造罪造愆、彼土念生何國。凡愚不了自性、不識身中西方、願東願西、悟人在處一般。所以佛言、隨所住處、常安樂。使君、心地但無不善、西方去此不遙。若懷不善之心、念佛往生難到。今勸善知識、先除十惡、即行十萬。後除八邪、乃過八千。念念見性、常行平直、到如彈指、便覩彌陀。能淨能寂即是釋迦、心起慈悲即是觀音、常

悲、爲現西方、大善。大師言、唐見西方無疑、即散。大衆愕然、莫知何是。^(奪)大師曰、大衆、作意聽。世人自色身是城、眼耳鼻舌身即是城門。外有六門、^(五)內有意門。心即是地、性即是王。性在王在、性去王無。性在身心存、性去身(心)壞。佛是自性作、莫向身(外)求。自性迷佛即衆生、自性悟衆生即是佛。慈悲即是觀音、喜捨名爲勢至、能淨是釋迦、平眞是彌勒。人我是須彌、邪心是大海、煩惱是波浪、毒心是惡龍、塵勞是魚鱉、虛妄即是神鬼、三毒即是地獄、愚癡即是畜生。十善是天堂。我無人、^(無人我)須彌自倒。除邪心、海水竭、煩惱無、波浪滅、毒害除、魚龍絕。自心地上覺性如來、^(放)施大智慧光明、照曜六門清淨、照破六欲諸天。(自性)下照、三毒若除、地獄一時消滅。內外明徹、不異西方。不作此修、如何到彼。^(聞)座下問說、讚聲徹天、應是迷人、^(了)人然便見(性)。使君禮拜、讚言善哉善哉、普願法界衆生、聞者一時悟解。

行喜捨名爲勢至。使君、但行十善、何須更願往生。不斷十惡之心、何佛即來迎請。若悟無^{*}生頓法、見西方只在刹那。不悟念佛欲往、路遙如何得達。師言、某甲與諸人、移西方如刹那間、目前便見。願^{*}不願^{*}。使君頂禮言、若此處見、何須更願往生。願和尚慈悲、便現西方、普願得見。師言、徒衆、用心、一時若見西方無疑、即散。師言、大衆、世人自色身是城、眼耳鼻舌是城門。外有五門、內有意識。心爲地、性是王、王居心地上。性在王在、性去王無。性在身心存、性無身心壞。佛向性中作、莫向外求。自性迷即是衆生、離迷即覺、覺即是佛。慈悲即是觀音、喜捨名爲勢至、能淨即釋迦、平直即彌陀。人我是須彌、邪心是海水、煩惱是波浪、毒害是惡龍、虛妄是鬼神、塵勞是魚鱉、貪瞋是地獄、愚癡是畜生。善知識、常行十善、天堂便至。除人我須彌倒。無邪心、海水竭、煩惱無、波浪滅、毒害除、魚鱉絕。自心地上覺性如來、放大光明、外照六門清淨、照破六欲諸天。自性內照、三毒若除、地獄一時消散。內外明徹、不異西方。不作此修、如何到彼。大衆聞說、俱歎善哉。但是迷人、了然見性。悉皆禮拜、唯言善哉、普願法界衆生、聞者一時悟解。

* 經||佛(興)(寬)。 * 疑||礙(底)。 * 里數||理(興)(寬)。 * 身||ナシ(金)。 * 是||ナシ(底)。 * 只爲||爲其(興)(寬)。 * 生彼||求生於彼(興)(寬)。 * 師言||使君(興)(寬)。 * 淨心||心淨即(興)(寬)。 * 西||雖西(興)(寬)。 * 淨||淨亦(興)(寬)。 * 造愆||彼土念||念佛求(興)(寬)。 * 西方||淨土(興)(寬)。 * 樂||常樂(興)(寬)。 * 遙||遠(金)。 * 佛||ナシ(底)。 * 生||ナシ(底)。 * 萬||善(興)(寬)。 (大)ハ右側ニ「善」トアリ。 * 後||ナシ(底)。 * 能淨能寂即是釋迦心起慈悲即是觀音常行喜捨名爲勢至||ナシ(興)(寬)。 * 無||衆(底)。 * 欲往||求

生(興)(寛)。*得||ナシ(底)。*師言||ナシ(興)(寛)。*願不願||不願(底)||各願見否(興)(寛)。*使君||皆(興)(寛)。*師言徒衆用心一時若見西方無疑即散||ナシ(興)(寛)。*若||得(金)(大)。*大衆||ナシ(金)(大)。*城||ナシ(興)(寛)。*識||門(興)(寛)。*爲||是(興)(寛)。*無||去(興)(寛)。*外||身外(興)(寛)。*離迷即覺||自性(興)(寛)||離迷(底)。*即||是(金)。*是||即(興)(寛)。*繫||鼈(底)。*竭||渴(金)。*繫||龍(興)(寛)。*照||能(興)(寛)。*自性||ナシ(底)(金)(大)。*ハ横ニ「自性」ト「イ本」ヲ示ス。*若||即(興)(寛)。*獄||獄等罪(興)(寛)。*但||曰(興)(寛)。*然||照(底)(興)(寛)。*善哉||ナシ(興)(寛)。

使君禮拜して又た問う、「弟子は僧俗の常に阿彌陀佛を念じて、西方に往生せんことを願うを見る。請う和尚よ説きたまえ、彼に生ずることを得んや。望むらくは爲に疑を破したまえ」。大師言く、「使君よ聽け、惠能與に説かん。世尊は舍衛國に在して、西方の引化を説きたまう。經文は分明に、此を去ること遠からず、とす。遠しと説くは只だ下根の爲にし、近しと説くは只だ上智に縁る。人は自ずから兩種なれども、法は兩つ無し。迷悟に殊なること有り、見に遲疾有り。迷人は佛を念じて、彼に生ぜんも、悟者は自ら其の心を淨うす。所以に佛は言わく、『其の心の淨きに隨つて、則ち佛土は淨し』。『使君よ、東方も但し心を淨むれば罪無し、西方も心淨からざれば愆有り。迷人は東方と西方とに生まれんことを願うも、悟人は所在の處、並皆な一種のみ。心但し不淨無ければ、西方は此を去ること遠からず。心に不淨の心を起せば、念佛して往生せんとするも到り難し。十惡を除け、即ち十萬を行かん。八邪無みせよ、即ち八千を過ぎん。但し直心を行ぜば、到ること彈指の如し。使君よ、但だ十善を行ぜよ、何ぞ更に往生を願うことを須いん。十惡の心を斷せずして、何の佛か即ち來たり迎請せん。若し無生の頓法を悟らば、西方を見ること、只だ刹那に在り。頓教大乘を悟らざれば、佛を念じて往生するは、路遙かにして如何が達することを得ん』。六祖言く、「惠能、

又た問う、「弟子は常に僧俗の『阿彌陀經』を念じて、西方に生ぜんことを願うを見る。請う和尚よ説きたまえ、彼に生ずることを得んや。願わくは爲に疑を破したまえ」。師言く、「使君よ善く聽け、某甲、與に説かん。世尊は舍衛國の中に在して、西方の引化を説きたまう。經文は分明に、此を去ること遠からず、とす。若し相を論じ里數を説かば、即ち十萬八千有り。若し身中に説かば、十惡八邪は便ち是れなり。遠しと説くは只だ下根の爲にし、近しと説くは其の上智の爲にす。人には兩種有れども、法には兩般無し。迷悟に殊なること有り、見に遲疾有り。迷人は佛を念じて、彼に生ぜんも、悟人は自ら其の心を淨うす。所以に佛は言わく、『其の心の淨きに隨つて、即ち佛土は淨し』。師言く、「東方の人も、但し心を淨むれば罪無し。西方の人も、心淨からざれば愆有り。東方の人にして罪を造るときは、佛を念じて西方に生れんことを求む。西方の人にして罪を造り愆を造るときは、彼の土にて念じて何れの國にか生れん。凡愚は自性を了らず、身中の西方を識らずして、東を願ひ西を願う。悟人は在處一般なり。所以に佛は言わく、『所住の處に隨つて常に安樂なり』。使君よ、心地に但し不善無ければ、西方は此を去ること遙かならず。若し不善の心を懷かば、念佛して往生せんとするも到り難し。今、善知識に勸む、先ず十惡を除け、即ち十萬を行かん。後に八邪を除け、

使君の與に西方を移して刹那の間に目前に便ち見せしめん。使君は見んと願うや。使君禮拜すらく、「若し此にして見ることを得ば、何ぞ往生するを須いん。願わくは和尚慈悲もて、爲に西方を現ぜよ、大いに善し」。大師言く、「唐に西方を見ること疑無ければ、即ち散ぜよ」。大衆愕然として何事なるかを知る莫し。大師曰く、「大衆よ大衆よ、作意して聽け。世人の自らの色身は是れ城にして、眼耳鼻舌は即ち是れ城門なり。外に五門有り、内に意門有り、心は即ち是れ地、性は即ち王なり。性在れば王在り、性去れば王無し。性在れば身心存し、性去れば身心壞す。佛は是れ自性の作なり、身外に向かつて求むること莫れ。自性迷えば佛も即ち衆生、自性悟れば衆生も即ち是れ佛なり。慈悲は即ち是れ觀音、喜捨は名づけて勢至と爲す。能淨は是れ釋迦、平直は是れ彌勒。人我は是れ須彌、邪心は是れ大海、煩惱は是れ波浪、毒心は是れ惡龍、塵勞は是れ魚鱉、虛妄は即ち是れ神鬼、三毒は即ち是れ地獄、愚癡は即ち是れ畜生なり」。十善は是れ天堂なり。人我無ければ須彌自ずから倒る。邪心を除けば海水は竭き、煩惱無ければ波浪は滅し、毒害除けば魚龍は絶す。自らの心地上の覺性の如來は、大智惠光明を放って、六門を照曜して清淨ならしめ、六欲の諸天を照破す。自性内に照して、三毒若し除けば、地獄は、一時に消滅す。内外明徹して、西方に異ならず。此の修を作さずして、如何が彼に到らん」。座下聞説いて讚聲天に徹し、應是る迷人も了然として便ち見性す。使君は禮拜し、讚じて言く、「善哉善哉、普ねく願わくは法界の衆生、聞く者の一時に悟解せんことを」。

乃ち八千を過ぎん。念念に見性して、常に平直を行ぜば、到るこ
と彈指の如くにして、便ち彌陀を觀ん。能淨能寂は即ち是れ釋迦、
心に慈悲を起すは即ち是れ觀音、常に喜捨を行うは名づけて勢至
と爲す。使君よ、但だ十善を行ぜよ、何ぞ更に往生を願うことを
須いん。十惡の心を斷ぜずして、何の佛か即ち來たり迎請せん。
若し無生の頓法を悟らば、西方を見ること、只だ刹那に在り。悟
らずして佛を念じて往くを欲するも、路遙かにして如何が達する
ことを得ん」。師言く、「某甲、諸人の與に、西方を移すこと刹那
の間の如くして、目前に便ち見せしめん。願うや願わざるや」。使
君頂禮して言く、「若し此處にて見ば、何ぞ更に往生を願うを須
いん。願わくは和尚慈悲もて、便ち西方を現じて、普く願わくは
見ることを得しめたまえ」。師言く、「徒衆よ、心を用いて一時に
若し西方を見ること疑無ければ、即ち散ぜよ」。師言く、「大衆よ、
世人の自らの色身は是れ城にして、眼耳鼻舌は是れ城門なり。外
に五門有り、内に意識有り。心は地と爲し、性は是れ王にして、
王は心地の上に居る。性在れば王在り、性去れば王無し。性在れ
ば身心存し、性無ければ身心壞す。佛は性中に向いて作る、外に
向かつて求むること莫れ。自性迷えば即ち是れ衆生、迷を離れば
即ち覺し、覺すれば即ち是れ佛なり。慈悲は即ち是れ觀音、喜捨は
名づけて勢至と爲す。能淨は即ち釋迦、平直は即ち彌陀。人我は是
れ須彌、邪心は是れ海水、煩惱は是れ波浪、毒害は是れ惡龍、虛
妄は是れ鬼神、塵勞は是れ魚鱉、貪嗔は是れ地獄、愚癡は是れ畜
生なり」。十善を識よ、常に十善を行ぜば、天堂便ち至る。人我を
除けば、須彌は倒る。邪心無ければ海水は竭き、煩惱無ければ波
浪は滅し、毒害を除けば、魚鱉は絶す。自らの心地上の覺性の如

四九 在俗への教え

(38) 大師言、善知識、若欲修行、在家亦得、不由在寺。在寺不修、如西方心惡之人。在家若修行、如東方人修善。但願自家修清淨、即是惡方。^(西)使君問和(尙)、在家如何修。願爲指授。大師言、善智識、^(知)惠能與道俗作無相頌。盡誦取、衣此修行、常與惠能^(衍字)說一處無別。頌曰、

說通及心通、如日至虛空。
惟傳頓教法、出世破邪宗。
教即無頓漸、迷悟有遲疾。
若學頓教法、愚人不可迷。^(悉)
說即須萬般、合離還歸一。
煩惱暗宅中、常須生惠日。
邪來因煩惱、正來煩惱除。
邪正疾不用、清淨至無餘。
菩提本清淨、起心即是妄。

來は、大光明を放つて、外に六門を照らして清淨ならしめ、六欲の諸天を照破す。自性内に照して、三毒若し除けば、地獄は、一時に消散す。内外明徹して、西方に異ならず。此の修を作さずして、如何が彼に到らん。大衆は聞説いて、俱に「善哉」と歎ず。但是る迷人も了然として見性す。悉く皆な禮拜して、唯だ言く、「善哉。普く願わくは法界の衆生、聞く者の一時に悟解せんことを」。

(45) 師言、善知識、若欲修行、在家亦得、不由在寺。在家能修、如東方人心善、在寺不修、如西方人心惡。但心清淨、即是自性西方。韋氏又問、在家如何修行。願爲教授。師言、吾與大衆、作無相頌。但依此修、常與吾同處無別。若不修行、雖在吾邊、如隔千里。頌曰、

說通及心通、如日處虛空。
唯傳見性法、出世破邪宗。
法即無頓漸、迷悟有遲疾。
只這見性法、愚人不可悉。
說即雖萬般、合理還歸一。
煩惱暗宅中、常須生惠日。
邪來煩惱至、正來煩惱除。
邪正俱不用、清淨至無餘。
菩提本自性、起心即是妄。

淨性^(在)於妄中、但正除三障。
 世閒若修道、一切盡不妨。
 常現在己過、與道即相當。
 色類自有道、離道別覓道。
 覓道不見道、到頭還自懊。
 若欲^(得)貪覓道、行正即是道。
 自若無正心、暗行不見道。
 若真修道人、不見世閒愚。
 若見世閒非、自非却是左。
 他非我有罪^(無)、我非自有罪。
 但自去非心、打破煩惱碎。
 若欲化愚人、是須有方便。
 勿令破彼疑、即是菩提見。
 法元在世閒、於世出世閒。
 勿離世閒上、外求出世閒。
 邪見出世閒^(是)、正見出世閒。
 邪正悉打却、^(菩提性宛然)。
 此但是頓教、亦名爲大乘。
 迷來經累劫、悟則剎那閒。

淨性^{*}在妄中、但正無三障。
 世人若修道、一切盡^{*}不妨。
 常自見己過、與道即相當。
 色類自有道、各自不相妨^{*}。
 離道別覓道、覓道不見道^{*}。
 欲得見真道、行正則是道^{*}。
 自若無道心、闇行不見道。
 若真修道人、不見世閒過。
 若見他人非、自非却在左^{*}。
 他非我不非、我非自有過^{*}。
 但自却非心、打破煩惱破^{*}。
 欲擬化他人、自須有方便。
 勿令彼有疑、則是自性見^{*}。
 法元在世閒、於世出世閒。
 一切盡打却、菩提性宛然^{*}。

* 修 || 行 (興) (寬)。* 韋氏 || 韋公 (興) (寬) || 使君 (金) (大)。* 又問 || 曰 (底)。* 吾 || ナシ (底)。* 衆 || 家 (寬)。* 修 || 依此 (金) (大) (興) (寬)。
 * 唯 || 惟 (興) (寬)。* 這 || 此 (興) (寬)。* 性法 || 法性 (底) || 性門 (興) (寬)。* 性 || 心 (興) (寬)。* 盡不 || 不相 (金) (大)。* 自不相妨 || 不相
 妨惱 (興) (寬)。* 覓道 || 終身 (興) (寬)。* 道 || 道到頭還自懊 (金) (大) || 道波波度一生到頭還自懊 (興) (寬)。* 則 || 即 (興) (寬)。以下同。*

在_レ是(興)(寛)。*破_レ破憎愛不關心長伸兩脚臥(興)(寛)。*見_レ現(興)(寛)。*法元_レ佛法(興)(寛)。*於世出世間_レ不離世間覺離世見
 菩提恰如求兎角正見名出世邪見是世間(興)(寛)。*一切_レ邪正(興)(寛)。*然_レ然此頌是頓教亦名大法船迷聞經累劫悟則利那間(興)(寛)。

大師言く、「善知識よ、若し修行せんと欲せば、在家も亦た得たり、寺に在るに由らず。寺に在りて修せずんば、西方の心悪しきの人の如し。在家にして若し修行せば、東方の人の善を修するが如し。但だ願わくは自家に清淨を修せよ、即ち是れ西方なり」。使君は和尚に問う、「在家は如何が修せん。願わくは爲に指授したまえ」。大師言く、「善知識よ、惠能は道俗の與に無相頌を作れり。盡く誦取して此に依つて修行せば、常に惠能と一處にして別なること無し」。頌に曰く、

説も通じ及び心も通じて、日の虚空に至るが如し。

惟だ頓教の法を傳えて、出世して邪宗を破す。

教は即ち頓漸無し、迷悟に遲疾有るのみ。

若し頓教の法を學ばんには、愚人は悉すべからず。

説は即ち須らく萬般なるべし、合離は還つて一に歸す。

煩惱暗宅の中、常に須らく惠日を生ずべし。

邪來れば因つて煩惱たり、正來れば煩惱除く。

邪正疾かに用いずんば、清淨にして無餘に至る。

菩提は本より清淨なり、心を起せば即ち是れ妄なり。

淨性は妄中に在り、但し正なれば三障を除く。

世間にして若し修道せば、一切盡く妨げず。

常に現われて己の過に在らば、道と即ち相い當る。

色類は自ずから道有り、道を離れて別に道を見めんや。

道を覓むれば道を見ず、到頭に還た自ら懊む。

若し道を見めんと欲せば、正を行ずる即ち是れ道なり。

師言く、「善知識よ、若し修行せんと欲せば、在家も亦た得たり、寺に在るに由らず。在家にして能く修せば、東方の人の心の善きが如し。寺に在りて修せずんば、西方の人の心悪しきが如し。但し心清淨ならば、即ち是れ自性の西方なり」。韋氏又た問う、「在家は如何が修行せん。願わくは爲に教授したまえ」。師言く、「吾れ大衆の與に無相頌を作れり。但し此れに依つて修せば、常に吾れと處を同くして別なること無し。若し修行せずんば、吾が邊りに在りと雖も、千里を隔つるが如し」。頌に曰く、

説も通じ及び心も通じて、日の虚空に處るが如し。

惟だ見性の法を傳えて、出世して邪宗を破す。

法は即ち頓漸無し、迷悟に遲疾有るのみ。

只だ這の見性の法は、愚人は悉すべからず。

説は即ち萬般なりと雖も、理に合して還つて一に歸す。

煩惱暗宅の中、常に須らく惠日を生ずべし。

邪來れば煩惱至り、正來れば煩惱除く。

邪正俱に用いずんば、清淨にして無餘に至る。

菩提は本より自性なり、心を起せば即ち是れ妄なり。

淨性は妄中に在り、但し正なれば三障無し。

世人若し道を修せば、一切盡く妨げず。

常に自ら己が過を見ば、道と即ち相い當る。

色類は自ずから道有り、各自に相い妨げず。

道を離れて別に道を見むれば、道を見めて道を見ず。

眞道を見めんと欲せば、正を行ずる則ち是れ道なり。

自ら若し正心無くんば、闇に行いて道を見ず。

若し眞の修道の人ならば、世間の愚を見ず。

若し世間の非を見れば、自らの非却つて是れ左る。

他の非は我れに罪無し、我が非は自らに罪有り。

但だ自ら非心を去り、煩惱を打破して碎く。

若し愚人を化せんと欲せば、是れ須らく方便有るべし。

彼の疑を破せしむること勿れ、即ち是れ菩提見わる。

法は元より世間に在り、世に於て世間を出す。

世間の上を離れて、外に世間を出でんと求むること勿れ。

邪見は是れ世間に在りして、正見は出世間なり。

邪正悉く打却すれば、菩提の性宛然たり。

此は但だ是れ頓教なり、亦た名づけて大乘と爲す。

迷來れば累劫を経るも、悟れば則ち刹那の間なるのみ。

五三 慧能、曹溪に歸る

(39) 大師言、善智識、汝等盡誦取此偈。依偈修行、去惠能

千里、常在能邊。(於)此不修、對面千里。各各自修。法不相

持。衆人且散。惠能歸漕溪山。衆生若有大疑、來彼山間。爲

汝破疑、同見佛性。合座官奪道俗、禮拜和尚、無不嗟嘆。善

哉大悟、昔所未聞。嶺南有福、生佛在此。誰能得智。一時盡

散。

*此ニナシ(興)(寬)。*修ニ修行(興)(寬)。*相ニナシ(底)。*山ニナシ(興)(寬)。*同見佛性ニ各見本心(興)(寬)。*在ニナシ(興)(寬)。*道ニ僧(興)(寬)。

大師言く、「善知識よ、汝等盡く此の偈を誦取せよ。偈に依つ

惠听本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

自ら若し道心無くんば、闇に行いて道を見ず。

若し眞の修道の人ならば、世間の過を見ず。

若し他人の非を見れば、自らの非却つて左に在り。

他の非は我れ非とせず、我が非は自ら過有り。

但だ自ら非心を却け、煩惱を打除し破す。

他人を化せんと欲せば、自ら須らく方便有るべし。

彼をして疑い有らしむること勿れ、則ち是れ自性見わる。

法は元より世間に在り、世に於て世間を出す。

一切盡く打却すれば、菩提の性宛然たり。

(46) 師言、善知識、總須誦取、依此偈修。言下見性、雖去

吾千里、如常在吾邊。於此言下不悟、即對面千里。各各自

修。法不相待。衆人且散。吾歸曹溪山。衆生有疑、却來相

問。爲衆破疑、同見佛性。時在會道俗、豁然大悟、咸讚善

哉、俱明佛性。

*同見佛性ニ各見本心(興)(寬)。*在ニナシ(興)(寬)。

師言く、「善知識よ、總て須らく誦取し、此の偈に依つて修す

て修行せば、惠能を去ること千里なるも、常に能が邊に在り。此に於て修せずんば、對面すとも千里ならん。各各自ら修せよ。法は相い待たず。衆人よ、且く散ぜよ。惠能は曹溪山に歸らん。衆生、若し大疑有らば、彼の山間に來れ。汝が爲に疑を破して、同じく佛性を見せしめん。合座の官寮、道俗は、和尚を禮拜し、嗟嘆せざる無し。「善哉大悟、昔未だ聞かざる所なり。嶺南に福有り、生佛此に在す。誰か能く知ることを得たる」。一時に盡く散ず。

五四 壇經をよるべとすべきこと

(40) 大師^(住)往曹溪山、韶・廣二州行化、四十餘年。若論門人、僧之與俗、三五千人、説不盡。若論宗指、傳授壇經、以此爲衣約^(依)。若不得壇經、即無稟受。須知法處年月日姓名^(去)、遍相付囑。無壇經稟承、非南宗定子也。未得稟承者、雖説頓教法、未知根本、修不免諍。但得法者、只勸修行。諍是勝負之心、與道違背。

* 餘||ナシ(興)(寛)。* 欲相||ナシ(興)(寛)。* 可名||ナシ(底)。

大師、曹溪山に住して、韶・廣二州に行化すること四十餘年なり。「若し門人を論ぜば、僧と俗と三五千人、説き盡くさず。若し宗旨を論ぜば、『壇經』を傳授して此を以て依約とす。若し『壇

べし。言下に見性せば、吾れを去ること千里なりと雖も、常に吾が邊に在るが如し。此の言下に於て悟らずんば、即ち對面すとも千里ならん。各各自ら修せよ。法は相い待たず。衆人よ、且く散ぜよ。吾れは曹溪山に歸らん。衆、若し疑い有らば、却來して相い問え。衆の爲に疑いを破して、同じく佛性を見せしめん。時に會に在りし道俗は、豁然として大悟し、咸な「善哉」と讚じ、俱に佛性を明らめたり。

(47) 九、諸宗難問門。

大師出世、行化四十餘年。諸宗難問、僧俗約千餘人、皆起惡心、欲相難問。師言、一切盡除、無名可名。名於自性無二之性、是名實性。於實性上、建立一切教門。言下便須自見。諸人聞説、總皆頂禮、請事爲師、願爲弟子。如此之徒、説不可盡。若論宗旨、傳授壇經者、即有稟承所付。須知去處年月時代姓名、遞相付囑。若無壇經稟承者、即非南宗弟子。緣未得所稟、雖説頓法、未契本心、終不免諍。但得法者、只勸修行。諍是勝負之心、與道相違矣。

* 授||受(底)(金)(大)。* 之心||ナシ(金)(大)。

九、諸宗の難問の門

大師出世して、行化すること四十餘年なり。諸宗の難問するもの、僧俗約千餘人あり、皆な惡心を起こして、相い難問せんと欲す。師言く、「一切盡く除けば、名の名づくべきもの無きも、自

『經』を得ざれば、即ち稟受ひんじゆ無し。須らく去處、年月日、姓名を知り、遞相たがひに付囑すべし。『壇經』の稟承無きは、南宗の弟子に非ざるなり。未だ稟承を得ざる者は、頓教の法を説くと雖も、未だ根本は知らず、終に諍まじいを免れず。但し法を得し者は、只だ修行せんことを勧む。諍まじいは是れ勝負の心にして、道と違背す」。

五五 南頓と北漸

(41) 世人盡傳南宗能北比秀、未知根本事由。且秀禪師於荆南荊南府當陽縣玉泉寺住持持修行、惠能大師於韶州城東三十五里曹溪山住。法即一宗、人有南比北。因此便立南北。何以漸頓。法即一種、見有遲疾。見遲即漸、見疾即頓。法無漸頓、人有利鈍。故名漸頓。

* 府ナシ（興）（寬）。 * 四ニ西（底）。

世人は盡く南宗の能と北の秀と傳うるも、未だ根本の事由を知らず。且つ秀禪師は、荆南府當陽縣の玉泉寺に於て住持修行し、惠能大師は、韶州城の東三十五里の曹溪山に於て住す。「法は即ち一宗にして、人に南北有り。此に因りて便ち南北を立つるの

惠昕本『六祖壇經』の研究（續）（石井）

性無二の性に名づけて、是れを實性じつじやうと名づく。實性の上に於て、一切の教門を建立す。言下に便ち須らく自ら見るべし」。諸人聞説いて、總すべて皆な頂禮し、事つかえて師と爲さんことを請い、弟子と爲らんことを願う。此かくの如きの徒は、説き盡すべからず。「若し宗旨を論ぜば、『壇經』を傳授せらるる者は、即ち稟承して付せらるる有り。須らく去處、年月、時代、姓名を知り、遞相たがひに付囑すべし。若し『壇經』の稟承無き者は、即ち南宗の弟子に非ず。未だ稟くる所もを得ざるに縁りて、頓法を説くと雖も、未だ本心に契あわず、終つひに諍まじいを免れず。但し法を得し者は、只だ修行せんことを勧む。諍まじいは是れ勝負の心にして、道と相違す」。

(48) 十、南北二宗見性門。

世人盡言、南能北秀、未知事由。且秀大師在荆南荆南府當陽縣玉泉寺住、能大師在韶州城東四十五里曹溪山住、法本一宗、人有南北。何名頓漸。法即一種、見有遲疾。法無頓漸、人有利鈍。故名頓漸。

十、南北の二宗、見性の門。

世人は盡く南能北秀と言ふも、未だ事由を知らず。且つ秀大師は、荆南府當陽縣の玉泉寺に在りて住し、能大師は、韶州城の東四十五里の曹溪山に在りて住す。「法は本より一宗にして、人に南北有り。何をか頓漸と名づくる。法は即ち一種にして、見

み。何ぞ漸頓を以てせんや。法は即ち一種にして、見に遲疾有り。見遅なれば即ち漸、見疾なれば即ち頓なり。法は漸頓無く、人に利鈍有り。故に漸頓と名づく。

遲疾有り。法は頓漸無く、人に利鈍有り。故に頓漸と名づく。

五六 志誠參ず

(42) 神秀師常見人說惠能法疾直旨路。秀師遂換門人僧志誠曰、汝聰明多智、汝與吾至曹溪山。到惠能所、禮拜但聽。莫言吾使汝來。所聽德意旨記取、却來與吾說。看惠能見解與吾誰疾遲。汝弟一早來、勿令吾怪。志誠奉使歡喜。遂半月中間、即至曹溪山。見惠能和當、禮拜即聽、不言來處。志誠聞法、言下便悟、即契本心。起立即禮拜、自言和尚、弟子從玉泉寺來。秀師處不德契悟。聞和尚說、便契本心。和尚慈悲、願當散示。惠能大師曰、汝從被來、應是細作。志誠曰、未說時即是、說乃了即(不)是。六祖言、煩惱即是菩提、亦復如是。

(49) 秀聞師說法、徑疾直指見性。遂命門人志誠曰、汝聰明多智。可與吾到曹溪山、禮拜但坐聽法。莫言吾使汝去、汝若聽得、盡心記取、却來與說、吾看彼所見、誰遲誰疾。火急早來、勿令吾怪。志誠唱喏。禮拜便行、經二十五日、至曹溪山。禮師坐聽、不言來處。志誠一聞、言下便悟。即起禮拜、自言和尚、弟子在玉泉寺秀和尚處、學道九年、不得契悟。今聞和尚一說、忽然悟解、便契本心。和尚慈悲、弟子生死事大、又恐輪廻、願當教示。師曰、汝從玉泉來、應是細作。對曰、不是。師曰、何得不是。對曰、未說即是、說了不是。師曰、煩惱菩提、亦復如此。

*師||能(金)(大)||能師(興)(寬)。*徑||任(底)。*聽||聽(底)。*去||來(興)(寬)。*與||ナシ(興)(寬)。*看||寬(底)。*唱喏||ナシ(興)(寬)||唱諾(金)(大)。*拜||辭(大)。*經||徑(底)。*二十五||五十餘(興)(寬)。*師||拜(金)(大)。*白||自(興)(寬)。*寺||ナシ(金)(大)。*學||覺(底)。*今||令(寬)。*便||使(金)。*慈悲||大慈悲(金)(大)||大慈(興)(寬)。*恐||悲(底)。*泉||泉寺(興)(寬)。*對||志誠(金)(大)。*對||志誠(金)(大)。*復||須(大)。*此||是(興)(寬)。

神秀師、常に人の惠能の法は疾やかに路を直指すと説くを見く。秀師、遂に門人の僧志誠を喚んで曰く、「汝は聰明多智なり。汝、我が與に曹溪山に至れ。惠能の所に到って、禮拜して但だ聽け。吾れ汝をして來らしむると言うこと莫れ。聽得する所

秀は、師の説法は徑疾やかに見性を直指すと聞く。遂に門人志誠に命じて曰く、「汝は聰明多智なり。吾が與に曹溪山に到って、禮拜して但だ坐して聽法すべし。吾れ汝をして去かしむと云うこと莫れ。汝若し聽得せば、心を盡して記取し、却來して與に説け。

の意旨を記取し、却來して吾が與に説け。惠能の見解と吾れと誰か疾遅なるかを見ん。汝第一に早く來れ、吾れをして怪しましむること勿れ」。志誠は使を奉じて歡喜す。遂に半月中間にして、即ち曹溪山に至る。惠能和尙に見えて禮拜して即ち聴き、來處を言わず。志誠は法を聞いて言下に便ち悟り、即ち本心に契う。起立して即ち禮拜し、自ら和尙に言く、「弟子は玉泉寺より來る。秀師の處に契悟することを得ず。和尙の説くを聞いて、便ち本心に契う。和尙慈悲もて、願わくは當に教示したまえ」。惠能大師曰く、「汝は彼より來たる、應に是れ細作なるべし」。志誠曰く、「未だ説かざる時は即ち是なるも、説き了れば即ち是ならず」。六祖言く、「煩惱即ち是れ菩提なることも、亦復た是の如し」。

五九 志誠に三學を説く

(43) 大師謂志誠曰、吾聞、與禪師教人、唯傳戒定惠。與和尚教人戒定惠如何。當爲吾説。志誠曰、秀和尚言、戒定惠、諸惡不作名爲戒、諸善奉行名爲惠、自淨其意名爲定。此即名爲戒定惠。彼作如是説。不知和尚所見如何。惠能和尙答曰、此説不可思議。惠能所見又別。志誠問、何以別。惠能答曰、見有遲疾。志誠(言)、請和尚説所見戒定惠。大師言、如汝(音)聽悟説看。悟所見處、心地無疑非、(是)自性戒、心地無亂、是自性定、心地無癡、自性是惠。能大師言、汝(師)戒定惠、勸小根諸人、吾戒定惠、勸上(根)人。得吾自(性)、亦不立

吾れ、彼の所見の誰か遅く誰か疾きかを見ん。火急ぎ早く來れ。吾れをして怪しましむること勿れ」。志誠唱喏す。禮拜して便ち行き、二十五日を経て曹溪山に至る。師を禮して坐して聴き、來處を言わず。志誠は一聞して言下に便ち悟る。即ち起つて禮拜して、和尙に白言す、「弟子は玉泉寺秀和尚の處に在りて學道すること九年なるも、契悟することを得ず。今、和尙の一説を聞いて、忽然として悟解し、便ち本心に契う。和尙慈悲もて、弟子は生死事大なり、又た輪廻を恐る、願わくは當に教示したまえ」。師曰く、「汝は玉泉寺より來たる、應に是れ細作なるべし」。對えて曰く、「是ならず」。師曰く、「何ぞ是ならざることを得ん」。對えて曰く、「未だ説かざれば即ち是なるも、説き了れば是ならず」。師曰く、「煩惱と菩提も、亦復た此の如し」。

(50) 師問志誠曰、吾聞、汝禪師教示學人、唯傳戒定惠。未審、汝師説戒定惠、行相如何。與吾説看。志誠曰、秀和尚説、諸惡不作名爲戒、諸善奉行名爲惠、自淨其意名爲定。此是戒定惠。彼説如此。未審、和尚所見如何。願爲解説。師曰、秀和尚所見、實不可思議。吾所見戒定惠又別。志誠啓和尚、戒定惠只合一種。如何更別。師曰、汝師説戒定惠、接大乘人。吾戒定惠、接最上乘人。悟解不同、見有遲疾。汝聽吾説、與彼同不。吾所説法、不離自性、離體説法、自性常迷。須知一切萬法、皆從自性起用、是真戒定惠等法。常見自性自

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

戒定惠。志誠言、請大師說、不立如何。大師言、自性無非無亂無礙、念念般若觀照、當離法相、有何可立。自性頓修、立有漸此、契以不立。志誠禮拜、便不離曹溪山。即爲門人、不離大師左右。

心、即是自性等佛。師言、志誠聽吾說。心地無非自性戒、心地無礙自性惠、心地無亂自性定。師言、汝師戒定惠、勸小根人。吾戒定惠、勸大根智人。若悟自性、亦不立菩提涅槃、亦不立解脫知見。無一法可得、方能建立萬法、是真見性。若解此意、亦名佛身、亦名菩提涅槃、亦名解脫知見、亦名十方國土、亦名恒河沙數、亦名三千大千、亦名大小藏十二部經。見性之人、立亦得、不立亦得。去來自由、無滯無礙、應用隨作、應語隨答、普見化身、不離自性。即得自在神通、遊戲三昧之力、此名見性。志誠再啓和尚、如何是立不立義。師曰、自性無非無礙無亂、念念般若觀照、常離法相、自由自在、縱橫盡得、有何可立。自性自悟、頓悟頓修、亦無漸次。所以能立一切法、佛言寂滅。有何漸次。志誠禮拜、便住曹溪、願爲門人、不離左右。

*禪||ナシ(金)(大)。*不||莫(金)(大)。*所||ナシ(金)。*和尚||曰(金)(大)。*說||ナシ(興)(寬)。*彼||彼說(金)。*法||法名爲相說(興)(寬)。*自||ナシ(底)。*師言志誠聽吾說||吾(興)(寬)。*言||曰(金)。*師言||ナシ(興)(寬)。*根||根智(興)(寬)。*立||ナシ(金)。*繫||般(底)。*河||ナシ(興)(寬)。*大||三大(金)。*化||他(底)。*立||ナシ(興)(寬)。*縱||蹤(金)(大)。*頓||ナシ(金)。*能||不(興)(寬)。*漸次||次(底)||次第(興)(寬)。

大師、志誠に謂いて曰く、「吾れ聞く、汝が禪師は人に教えて、唯だ戒定惠を傳うのみと。汝が和尚の人に戒定惠を教うる事如何。當に吾が爲に説くべし」。志誠曰く、「秀和尚は言く、『戒定惠とは、諸惡不作を名づけて戒と爲し、諸善奉行を名づけて惠と爲し、自淨其意を名づけて定と爲す。此れを即ち名づけて戒定惠と爲す』。彼は是の如きの説を作す。知らず、和尚の所見は如

師は志誠に問うて曰く、「吾れ聞く、汝が禪師は學人に教示するに、唯だ戒定惠を傳うのみと。未審し、汝が師の戒定惠を説く行相は如何。吾が與に説き看よ」。志誠曰く、「秀和尚は説く、『諸惡不作を名づけて戒と爲し、諸善奉行を名づけて惠と爲し、自淨其意を名づけて定と爲す。此れは是れ戒定惠なり』。彼の説は此の如し。未審し、和尚の所見は如何。願わくは爲に解説したま

何」。惠能和尙答えて曰く、「此の説は不可思議なり。惠能が見は又た別なり」。志誠問う、「何を以てか別なる」。惠能答えて曰く、「見に遅疾有ればなり」。志誠言く、「請うらくは、和尙が見の戒定恵を説きたまわんことを」。大師言く、「汝、吾が説くを聴き看よ。吾が所見の處は、心地に非無きは是れ自性の戒、心地に亂無きは是れ自性の定、心地に癡無きは是れ自性の恵なり」。能大師言く、「汝が師の戒定恵は小根の諸人に勸む。吾が戒定恵は上根の人に勸む。自性を悟ることを得れば、亦た戒定恵を立てず」。志誠言く、「請うらくは大師の説かんことを、立てずとは如何」。大師言く、「自性は非無く、亂無く、癡無く、念念に般若もて觀照して、常に法相を離る。何の立つべきか有らん。自性は頓に修して、漸次有ること無し。所以に立てず」。志誠禮拜して便ち曹溪山を離れず。即ち門人と爲りて、大師の左右を離れず。

え」。師曰く、「秀和尙の所見は、實に不可思議なり。吾が見の戒定恵は又た別なり」。志誠、和尙に啓す、「戒定恵は只だ合に一種なるべし。如何が更に別なる」。師曰く、「汝が師の戒定恵を説くは、大乘の人を接す。吾が戒定恵は、最上乘の人を接す。悟解は同じからず、見に遅疾有り。汝は吾が説を聴いて、彼と同じきや。吾が説く所の法は、自性を離れず。體を離れて法を説くは、自性常に迷えり。須らく知るべし、一切の萬法は、皆な自性より用を起こす、是れ眞の戒定恵の等しき法なり。常に自性自心を見る、即ち是れ自性の等しき佛なり」。師言く、「志誠よ、吾が説くを聴け。心地に非無きは自性の戒、心地に癡無きは自性の恵、心地に亂無きは自性の定なり」。師言く、「汝が師の戒定恵は小根の人に勸む。吾が戒定恵は大根智の人に勸む。若し自性を悟れば、亦た菩提涅槃を立てず、亦た解脱知見を立てず。一法の得べき無くして、方に能く萬法を建立す、是れ眞の見性なり。若し此の意を解れば、亦た佛身と名づけ、亦た菩提涅槃と名づけ、亦た解脱知見と名づけ、亦た十方國土と名づけ、亦た恒河沙數と名づけ、亦た三千大千と名づけ、亦た大小藏十二部經と名づく。見性の人は、立つるも亦た得たり、立てざるも亦た得たり。去來自由にして無滯無礙、用に應じて隨つて作し、語に應じて隨つて答え、普ねく化身を見て、自性を離れず。即ち自在神通、遊戲三昧の力を得るを、此れを見性と名づく」。志誠再び和尙に啓すらく、「如何なるか是れ立不立の義」。師曰く、「自性は非無く、癡無く、亂無く、念念に般若もて觀照して、常に法相を離れ、自由自在にして縱横盡く得て、何の立つべきか有らん。自性は自ら悟り、頓悟頓修して亦た漸次無し。所以に能く一切の法を立てて、佛は寂滅

六一 法達參ず

(44) 又有一僧、名法達。常誦法華經七年、心迷不知正法之處。(來問曰)、經上有疑。大師智惠廣大、願爲時疑。大師言、法達、法即甚達、汝心不達。經上無癡、(汝心自疑)。汝心自耶、而求正法。吾心正定、即是持經。吾一生已來、不識文字。汝將法華經來、對吾讀一遍、吾問即之。法達取經、到對大師讀一遍。六祖問曰、即識佛意、便汝法達、說法華經。六祖言、法達、法華經無多語、七卷盡是譬喻內緣。如來廣說三乘、只爲世人根鈍。經聞公明、無有餘乘、唯一佛乘。大師(言)、法達、汝聽一佛乘、莫求二佛乘、迷却汝聖。經中何處是一佛乘。汝與說。經云、諸佛世尊、唯汝一大事因緣故、出現於世。△已上十六家是正法。▽。(此)法如何解、此法如何修。汝聽吾說。人心不思、本源空寂、離却邪見、即一大是因緣。內外不迷、即離兩邊。外迷看相、內迷著空。於相離相、於空離空、即是不空迷。吾此法一念心開、出現於世。心開何物、開佛知見。佛猶如覺也、分爲四門。開覺知見、示覺知見、悟覺知見、入覺知見。(此名)開示悟入。(從)上一處入、即覺知見。見自本性、即得出世。大師言、法達、悟常願一切世人、心地常自開佛知見、莫開衆生知見。世人心(邪)、愚迷造惡、自開衆生知見。世人心正、起智惠

と云う。何の漸次か有らん。志誠は禮拜して、便ち曹溪に住り、門人と爲らんことを願ひ、左右を離れず。

(51) 復有一僧、名曰法達。常誦法華經七年、心迷不悟正法。來詣曹溪、禮拜問曰、和尚、弟子誦法華經、心常有疑。又不知正法之處。和尚智惠廣大、願爲決疑。師曰、法達、法即甚達、汝心不達。經上無疑、汝心自疑。汝心邪、而求正法。吾心正、則是持經。吾不識文字。汝取經來、誦之一遍。吾聞即知。法達取經、便誦一遍。師知佛意、乃與說經。師言、法達、經無多語、七卷盡是譬喻內緣。如來廣說三乘、只爲世人根鈍。經文分明、無有餘乘、唯一佛乘。汝聽一佛乘、莫求二乘、迷却汝性。且經中何處是一佛乘。吾聞汝誦經云、諸佛世尊、唯以一大事因緣故、出現於世。△正法有十六字▽。此法如何解、如何修。汝用心聽、吾爲汝說。師言、法達*人心不思、本來寂靜、離却邪見、即大事因緣。內外不迷、即離兩邊。外迷著相、內迷著空。於相離相、於空離空、即是不迷。若悟此法、一念心開、出現於世。心開何事、開佛知見。佛猶覺也、分爲四門。開覺知見、示覺知見、悟覺知見、入覺知見。此名開示悟入。從上一處入、即覺知見。見自本性、即得出現。師言、吾勸一切人、於自心地、常開佛知見。世人心邪、愚迷造罪、口善心惡、貪嗔嫉妬、讒佞侵害、自開衆生知見。世人心正、常起智惠、觀照自心、正行善、自開佛知見。

觀照、自開佛智見^(知)。莫開衆生智見^(知)。開佛智見、即出世。大師言、法達、此是法達經一乘法。向下分三、爲名人故。汝但於一佛乘。大師言、法達、心行轉法華、不行法華轉。心正轉法華、心邪法華轉。開佛智見轉法華、開衆生智見被法華轉。大師言、努力依法修行、即是轉經。法達一聞、言下大悟、涕淚悲泣、自言和尚、實未曾轉法華、七年被法華轉。已後轉法華、念念修行佛行。大師言、即佛行是佛。其時聽入無不悟者。

汝須念念開佛知見。莫開衆生知見。開佛知見、即是出世。師言、法達、此是法華經一乘義。向下爲迷人故。汝但依一佛乘。師言、法達、心行轉法華、不行法華轉。心正轉法華、心邪法華轉。開佛知見、轉法華。努力依法修行、即是轉經。自心若不念念修行、即常被經轉。法達一聞、言下大悟、涕淚悲泣、白大師言、實未曾轉法華、七年被法華轉。念念願修佛行。師言、行佛行是佛。其在會者、各得見性。

* 華||花(底)。以下同。* 七年心迷不悟正法來詣曹溪禮拜問曰和尚弟子誦法華經||ナシ(金)(大)。* 智||ナシ(底)。* 上||本(興)(寬)。
 * 邪||自邪(興)(寬)。* 而||則(興)(寬)。* 正||本正(興)(寬)。* 來||來誦(底)。* 聞||ナシ(金)。* 誦||讀(金)(大)(興)。* 七||十(興)。
 * 有||唯有一(金)(大)。* 聽||聽以下二二丁裏二三丁表ト二三丁裏二四丁表ト寫眞ノ順序ヲ誤ル(金)。* 人心||心人(金)||人心何(底)(興)(寬)。* 即||即是(興)(寬)。* 是||是内外(興)(寬)。* 上||ナシ(興)(寬)。* 自心正行善||ナシ(金)(大)。* 正||止惡(興)(寬)。
 * 佛||佛之(金)(大)。* 開佛知見||ナシ(金)(大)。* 是||見(金)(大)。* 世||世開衆生知見即是世間(興)(寬)。* 言||又言(興)(寬)。
 * 乘||乘之(興)(寬)。* 爲迷人故||分之爲三乘者蓋爲迷人(興)(寬)。* 乘||乘修行(興)(寬)。* 言||又言(興)(寬)。* 轉法華||即是汝轉法華經(興)(寬)。* 法華轉||即是被法華經轉(興)(寬)。* 淚悲||ナシ(金)。* 念念願||自今方(興)(寬)。* 佛行||行佛(底)。* 其||時(興)(寬)。* 各||ナシ(底)。

又た一僧有り、法達と名づく。常に『法華經』を誦すること七年なるも、心迷うて正法の處を知らず。來り問うて曰く、「經上に疑い有り。大師は智惠廣大なり。願わくは爲に疑を決したまえ」。大師言く、「法達よ、法は即ち甚だ達するも、汝は心達せず。經上に疑無し、汝が心に自ら疑うのみ。汝は心自ら邪にして、而も正法を求む。吾れは心に正定す、即ち是れ持經なり。吾れは一生已來、文字を識らず。汝、『法華經』を將ち來つて、吾れに對つて讀むこと一遍せよ。吾れ聞かば即ち知らん」。法達は經を取りて、則ち大師に對つて讀むこと一遍す。六祖聞き已つて、

復た一僧有り、名づけて法達と曰う。常に『法華經』を誦すること七年なるも、心迷うて正法を悟らず。曹溪に來詣り、禮拜して問うて曰く、「和尚よ、弟子は『法華經』を誦するも、心に常に疑い有り。又た正法の處を知らず。和尚は智惠廣大なり。願わくは爲に疑を決したまえ」。師曰く、「法達よ、法は即ち甚だ達するも、汝は心達せず。經上に疑無し、汝が心に自ら疑うのみ。汝は心邪にして、而も正法を求む。吾れは心正なり、則ち是れ持經なり。吾れは文字を識らず。汝は經を取り來つて、之れを誦すること一遍せよ。吾れ聞かば即ち知らん」。法達は經を取りて、

即ち佛意を識り、便ち法達の與に『法華經』を説く。六祖言く、「法達よ、『法華經』は多語無し、七卷盡く是れ譬喩因縁なり。如來の廣く三乘を説くは、只だ世人の根の鈍なるが爲なり。經文に分明たり、『餘乗有ること無し、唯だ一佛乗のみ』。大師言く、「法達よ、汝は一佛乗を聽いて、二佛乗を求むること莫れ、汝が性を迷却せん。經中の何れの處か是れ一佛乗なる。汝が與に説かん。經に云く、『諸佛世尊は、唯だ一大事因縁を以ての故に、世に出現したまう』。△已上の十六字は是れ正法なり▽。此の法は如何が解り、此の法は如何が修せん。汝、吾が説くを聽け」。「人、心に思わざれば、本源空寂にして、邪見を離却する、即ち一大事因縁なり。内外に迷わざれば、即ち兩邊を離る。外に迷うて相に著し、内に迷うて空に著す。相に於て相を離れ、空に於て空を離るれば、即ち是れ迷わざるなり。此の法を悟れば、一念に心開き、世に出現するなり。心に何物をか開く、佛知見を開くなり。佛とは猶お覺の如し、分つて四門と爲す。覺知見を開き、覺知見を示し、覺知見を悟り、覺知見に入る。此を開示悟入と名づく。上の一處より入れば、即ち覺知見なり。自らの本性を見れば、即ち出世することを得るなり」。大師言く、「法達よ、吾れ常に願う、一切世人は心地に常に自ら佛知見を開いて、衆生知見を開くこと莫れと。世人は心邪なれば、愚迷にして惡を造り、自ら衆生知見を開く。世人は心正なれば、智恵を起して觀照し、自ら佛知見を開く。衆生知見を開くこと莫れ。佛知見を開くは、即ち出世なり」。大師言く、「法達よ、此れは是れ『法華經』の一乗の法なり。向下分つて三とするは、迷人の爲の故なるのみ。汝は但だ一佛乘に依れ」。大師言く、「法達よ、心、行ずれば『法華』を轉

便ち誦すること一遍す。師は佛意を知り、乃ち與に經を説く。師言く、「法達よ、經には多語無し、七卷盡く是れ譬喩因縁なり。如來の廣く三乘を説くは、只だ世人の根の鈍なるが爲なり。經文に分明たり、『餘乗有ること無し、唯だ一佛乗のみ』。汝は一佛乗を聽いて、二乗を求むること莫れ、汝が性を迷却せん。且つ經中の何れの處か是れ一佛乗なる。吾れ汝の誦經を聞くに、云く、『諸佛世尊は、唯だ一大事因縁を以ての故に、世に出現したまう』。△正法は十六字に有り▽。此の法は、如何が解り、如何が修せん。汝、心を用いて聽け、吾れ汝の爲に説かん」。師言く、「法達よ、人、心に思わざれば、本來寂靜にして、邪見を離却する、即ち一大事因縁なり。内外に迷わざれば、即ち兩邊を離る。外に迷うて相に著し、内に迷うて空に著す。相に於て相を離れ、空に於て空を離るれば、即ち是れ迷わざるなり。若し此の法を悟れば、一念に心開き、世に出現するなり。心に何事をか開く、佛知見を開くなり。佛とは猶お覺のごとし、分つて四門と爲す。覺知見を開き、覺知見を示し、覺知見を悟り、覺知見に入る。此を開示悟入と名づく。上の一處より入れば、即ち覺知見なり。自らの本性を見れば、即ち出現することを得るなり」。師言く、「吾れは一切の人に勸む、自らの心地に於て、常に佛知見を開けと。世人は心邪なれば、愚迷にして罪を造り、口は善なるも心は惡にして、貪瞋嫉妬し、讒佞侵害し、自ら衆生知見を開く。世人は心正なれば、常に智恵を起こし、自心を觀照し、正しく善を行じて、自ら佛知見を開く。汝は須らく念念佛知見を開くべし。衆生知見を開くこと莫れ。佛知見を開くは、即ち是れ出世なり」。師言く、「法達よ、此れは是れ『法華經』の一乗の義なり。向下は迷人の爲の故なる

じ、行ぜずんば『法華』に轉ぜらる。心正なれば『法華』を轉じ、心邪なれば『法華』に轉ぜらる。佛知見を開けば『法華』を轉じ、衆生知見を開けば『法華』に轉ぜらる。大師言く、「努力して法に依つて修行せよ、即ち是れ經を轉ずるなり」。法達は一たび聞いて、言下に大悟し、涕淚悲泣して和尚に白言す、「實に未だ曾て『法華』を轉ぜず、七年『法華』に轉ぜらる。已後は『法華』を轉じて、念念に佛行を修行せん」。大師言く、「即ち佛行する是れ佛なり」。其の時、聽く人は悟らざる者無し。

六四 智常參ず

(45) 時有一僧、名智常。來曹溪山、禮拜和尚、聞四乘法義。智常聞和尚曰、佛說三乘。又言最上乘、弟子不解、望爲敬示。惠能大師曰、汝(向)自身心見、莫著外法相。元無四乘法。人心不量四等、法有四乘。見聞讀誦是小乘、悟(法)解義是中乘、衣法修行是大乘。萬法盡通、萬幸俱備、一切無離、但離法相、作無所得、是最上乘。乘是最上行義、不在口諍。汝須自修、莫問悟也。

* 僧 || 一僧(金)(大)。* 問四乘義 || ナシ(金)(大)。* 乘 || 乘之(興)(寬)。* 義 || 義云(興)(寬)。* 尚 || 尚曰(金)(大)。* 無四乘法 || 法無四乘(底)。* 作 || 一(興)(寬)。* 乘是 || ナシ(底)。義 || 也(底)。* 諍 || 誦(金)(大) || 爭(興)(寬)。* 知 || 知自悟自行(金)(大) || 如(興)(寬)。* 四 || (大)ハ横ニ「三ク」ト示ス。

時に一僧有り、智常と名づく。曹溪山に來つて和尚を禮拜し、四乗の法義を問う。智常、和尚に問うて曰く、「佛は三乘を説く。又た最上乘を言うは、弟子解せず、望むらくは爲に教示したまえ」。

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

のみ。汝は但だ一佛乘に依れ。師言く、「法達よ、心、行ずれば『法華』を轉じ、行ぜずんば『法華』に轉ぜらる。心正なれば『法華』を轉じ、心邪なれば『法華』に轉ぜらる。佛知見を開けば『法華』を轉ず。努力して法に依つて修行せよ、即ち是れ經を轉ずるなり。自心若し念念修行せずんば、即ち常に經に轉ぜらる」。法達は一たび聞いて、言下に大悟し、涕淚悲泣して大師に白して言く、「實に未だ曾て『法華』を轉ぜず、七年『法華』に轉ぜらる。念念に願うて佛行を修せん」。師言く、「佛行を行ずれば、是れ佛なり」。其の會に在りし者、各々見性することを得たり。

(52) 復有僧、名曰智常。禮拜問四乘法義。啓和尚、佛說三乘法。又言最上乘、弟子不解、願爲教授。師曰、汝向自心見、莫著外法相。無四乘法、人心自有四等。見聞轉讀是小乘、悟法解義是中乘、依法修行是大乘。萬法盡通、萬行俱備、一切不染、離諸法相、作無所得、名最上乘。乘是行義、不在口諍。汝須自修、莫問吾也。一切時中、自性自知、是四乘法義。

復た僧有り、名づけて智常と曰う。禮拜して四乗の義を問う。和尚に啓す、「佛は三乗の法を説く。又た最上乘を言うは、弟子解せず、願わくは爲に教授したまえ」。師曰く、「汝は自心に向か

惠能大師曰く、「汝は自心に向つて見よ、外の法相に著すること莫れ。元より四乗の法無し。人の心に自ら四等有りて、法に四乗有るのみ。見聞して讀誦するは是れ小乗、法を悟り義を解するは是れ中乗、法に依つて修行するは是れ大乘なり。萬法盡く通じ、萬行俱に備わり、一切離ること無く、但だ法相を離れ、作して得る所無きは、是れ最上乘なり。乗とは是れ行の義なり、口もて諍うに在らず。汝は須らく自ら修すべし、吾れに問うこと莫れ」。

七三 神會參ず

(46) 又有一僧、名神會。南陽人也。至曹溪山、禮拜問言、和尚坐禪、見亦不見。大師起把(拄杖)打神會三下、却問神會、吾打汝、痛不痛。神會答言、亦痛亦不痛。六祖言曰、吾亦見亦不見。神會又問大師、何以亦見亦不見。大師言、吾亦見、常見自過患、故云亦見。亦不見者、不見天地人過罪。所以亦見亦不見。汝亦痛亦不痛如何。神會答曰、若不痛、即同無情木石。若痛、即同凡(夫)即起於恨。大師言、神會、向前見不見是兩邊、痛(不痛)是生滅。汝自性且不見、敢來弄人。禮拜禮拜更不言。大師言、汝心迷不見、問善知識覓路。以心悟自見、依法修行。汝自名不見自心、却來問惠能見否。吾不自知、代汝迷不得。汝若自見、代得吾迷。何不自修、問吾見否。神會作禮、便爲門人、不離曹溪山中、常在左右。

*南||當(興)(寬)。*會||會來至曹溪(金)(大)。*拄||柱(金)(大)(興)。*還||還(興)(寬)。*對云||答曰(金)(大)。*曰||言(興)(寬)。*所||是(興)(寬)。*即起於||應生瞋(金)(大)。*於||ナシ(底)。*言||曰(興)(寬)。*弄||弄(底)。*悔||悔(底)(金)。*曰||

つて見よ、外の法相に著すること莫れ。四乗の法は無く、人の心に自ら四等有るのみ。見聞して轉讀するは是れ小乗、法を悟り義を解するは是れ中乗、法に依つて修行するは是れ大乘なり。萬法盡く通じ、萬行俱に備わり、一切に染まらずして、諸々の法相を離れ、作して得る所無きを、最上乘と名づく。乗とは是れ行の義なり。口もて諍うに在らず。汝は須らく自ら修すべし、吾れに問うこと莫れ。一切時中、自性自知なる、是れ四乗の義なり」。

(53) 又玉泉寺有一童子、年十三歲、南陽縣人、名曰神會。* 禮拜三拜、問曰、和尚坐禪、還見不見。師以拄杖打三下、却問、吾打汝、還痛不痛。對云、亦痛亦不痛。師曰、吾亦見亦不見。神會問、如何是亦見亦不見。師曰、吾之所見、常見自心過愆、不見他人是非好惡、所以亦見亦不見。汝言、亦痛亦不痛如何。汝若不痛、同其木石。若痛、即同凡夫即起於恨。師言、神會小兒、向前見不見、是二邊、痛不痛屬生滅。汝自性且不見、敢來弄人。神會禮拜悔謝、更不敢言。師曰、汝自迷不見、問善知識覓路、汝心悟、即自見性、依法修行。汝自迷不見自心、却來問吾見與不見。吾見自知、代汝迷不得。汝若自見、不代吾迷。何不自知見、問吾見不見。神會禮經百拜、求謝愆過、請事爲師、不離左右。

*南||當(興)(寬)。*會||會來至曹溪(金)(大)。*拄||柱(金)(大)(興)。*還||還(興)(寬)。*對云||答曰(金)(大)。*曰||言(興)(寬)。*所||是(興)(寬)。*即起於||應生瞋(金)(大)。*於||ナシ(底)。*言||曰(興)(寬)。*弄||弄(底)。*悔||悔(底)(金)。*曰||

又曰(興)(寛)。*心||若心(興)(寛)。*心||若心(興)(寛)。*自迷||ナシ(底)||迷(金)(大)。*吾見||ナシ(底)。*代||豈代(興)(寛)。
*不得||ナシ(興)(寛)。*不||亦不(興)(寛)。*見||自見乃(興)(寛)。*見||見與(興)(寛)。*經百||百餘(興)(寛)。

又た一僧有り、神會と名づく。南陽の人なり。曹溪山に至りて、禮拜して問うて言く、「和尚は坐禪して、見か亦た不見か」。大師は起ちて、拄杖を把つて神會を打つこと三下して、却つて神會に問う、「吾れは汝を打つ、痛か不痛か」。神會答えて言く、「亦た痛、亦た不痛なり」。六祖言いて曰く、「吾れも亦た見、亦た不見なり」。神會は又た大師に問う、「何を以てか亦た見、亦た不見なる」。大師言く、「吾が亦た見とは、常に自らの過患を見る、故に亦た見と云う。亦た不見とは、天地人の過罪を見ず。所以に亦た見、亦た不見なり。汝が亦た痛、亦た不痛とは如何」。神會答えて曰く、「若し不痛ならば、即ち無情の木石に同じ。若し痛ならば、即ち凡夫の即ち恨みを起すに同じ」。大師言く、「神會が向前の見と不見とは是れ兩邊、痛と不痛とは是れ生滅なり。汝は自性すら且つ見ず、敢えて來つて人を弄す」。神會禮拜して更に言わす。大師言く、「汝は心迷うて見ずんば、善知識に問うて路を覓めよ。汝、心悟らば自ら見、法に依つて修行せよ。汝自ら迷うて自心を見ず、却つて來つて惠能が見と不見を問う。吾が見は自ら知り得んや。何ぞ自ら修せずして、吾が見と不見とを問うや」。神會作禮して便ち門人と爲り、曹溪山中を離れず、常に左右に在り。

七六 三科の法門

(47) 大師遂喚門人法海・志誠・法達・智常・志通・志徹・

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

又た玉泉寺に一童子有り、年は十三歳、南陽縣の人なり、名づけて神會と曰う。師を禮すること三拜して問うて曰く、「和尚は坐禪して、還つて見か不見か」。師は拄杖を以て打つこと三下して、却つて問う、「吾れは汝を打つ、還つて痛か不痛か」。對えて云く、「亦た痛、亦た不痛なり」。師は曰く、「吾れも亦た見、亦た不見なり」。神會問う、「如何なるか是れ亦た見、亦た不見なる」。師曰く、「吾れの所見は、常に自心の過愆を見て、他人の是非好悪を見ず。所以に亦た見、亦た不見なり。汝が言う亦た痛、亦た不痛とは如何。汝若し不痛ならば、其の木石に同じ。若し痛ならば、即ち凡夫の即ち恨みを起すに同じ」。師言く、「神會小兒が向前の見と不見とは是れ二邊、痛と不痛とは生滅に屬す。汝は自性すら且つ見ず、敢えて來つて人を弄す」。神會は禮拜して悔謝し、更に敢えて言わす。師曰く、「汝は心迷うて見ずんば、善知識に問うて路を覓めよ。汝、心悟らば、即ち自ら見性して、法に依つて修行せよ。汝自ら迷うて自心を見ず、却つて來つて吾れに見と不見を問う。吾が見は自ら知る、汝が迷うに代ることを得ず。汝若し自ら見ば、吾が迷うに代らず。何ぞ自ら知見せずして、吾れに見と不見を問うや」。神會は禮すること百拜を経て、愆過を謝せんことを求め、事えて師と爲さんことを請い、左右を離れず。

又た玉泉寺に一童子有り、年は十三歳、南陽縣の人なり、名づけて神會と曰う。師を禮すること三拜して問うて曰く、「和尚は坐禪して、還つて見か不見か」。師は拄杖を以て打つこと三下して、却つて問う、「吾れは汝を打つ、還つて痛か不痛か」。對えて云く、「亦た痛、亦た不痛なり」。師は曰く、「吾れも亦た見、亦た不見なり」。神會問う、「如何なるか是れ亦た見、亦た不見なる」。師曰く、「吾れの所見は、常に自心の過愆を見て、他人の是非好悪を見ず。所以に亦た見、亦た不見なり。汝が言う亦た痛、亦た不痛とは如何。汝若し不痛ならば、其の木石に同じ。若し痛ならば、即ち凡夫の即ち恨みを起すに同じ」。師言く、「神會小兒が向前の見と不見とは是れ二邊、痛と不痛とは生滅に屬す。汝は自性すら且つ見ず、敢えて來つて人を弄す」。神會は禮拜して悔謝し、更に敢えて言わす。師曰く、「汝は心迷うて見ずんば、善知識に問うて路を覓めよ。汝、心悟らば、即ち自ら見性して、法に依つて修行せよ。汝自ら迷うて自心を見ず、却つて來つて吾れに見と不見を問う。吾が見は自ら知る、汝が迷うに代ることを得ず。汝若し自ら見ば、吾が迷うに代らず。何ぞ自ら知見せずして、吾れに見と不見を問うや」。神會は禮すること百拜を経て、愆過を謝せんことを求め、事えて師と爲さんことを請い、左右を離れず。

(54) 十一、教示十僧傳法門。△滅度年月附。▽。

爾時、師喚門人法海・志誠・法達・神會・智常・智通・志

志道・法珍・法如・神會。大師言、汝等拾弟子近前。汝等不同餘人。吾滅度後、汝各爲一方頭。吾教汝說法、不失本宗。舉(三)科法門・動(用)三十六對・出沒即離兩邊。說一切法、莫離於性相。若有人問法、出語盡雙、皆取法對。來去相因、究竟二法盡除、更無去處。三科法門者、蔭・界・入。陰・是五陰、界(是)十八界、(入)是十二入。何名五陰。色陰・受陰・相陰・行陰・識陰。是。何名十八界。六塵・六門・六識。何名十二入。外六塵・中六門。何名六塵。色・聲・香・味・獨・法。是。何名六門。眼・耳・鼻・舌・身・意。是。法性起六識、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識、六門・六塵。自性含萬法、名爲含藏識。思量即轉識、生六識、出六門、(見)六塵、是三六十八由。自性邪起、十八邪合、自性(正起)、十八正合。惡用即衆生、善用即佛。用油何等。油自性對。

* 誠法||ナシ(大)。* 智||知(底)。* 報||ナシ(興)(寬)。* 吾滅度後凡爲人師改易者多||ナシ(興)(寬)。* 汝||ナシ(底)。* 諸||說(興)(寬)。* 問||問汝法(興)(寬)。* 法||ナシ(底)。* 三||三以下(興)(寬)ハ割注ナク、大イニ異ニス。(補6)。* 六塵者||ナシ(金)。* 六門者||金(大)ハ太字。* 名含藏識||金(大)ハ細字。* 合||ナシ(金)(大)。* 即||即是(金)。

大師、遂に門人の法海・志誠・法達・智常・志通・志徹・志道・法珍・法如・神會を喚ぶ。大師言く、「汝等拾弟子近前せよ。汝等は餘人と同じからず。吾が滅度の後は、汝各々一方の頭と爲れ。吾れ汝をして法を説くに、本宗を失わざらしめん。三科の法門・動用の三十六對・出沒即離の兩邊を擧せん。一切法を説くに、性相を離ること莫れ。若し人有りて法を問わば、語を出だ

徹・志道・法珍・法如等報言、吾滅度後、凡爲人師、改易者多。汝等十人向前。汝等不同餘人。吾滅度後、各爲一方師。吾今教汝諸法、不失本宗。先須擧三科法門・動用三十六對・出沒即離兩邊。說一切法、莫離自性。忽有人問、出語盡雙、皆取法對。來去相因、究竟二法盡除、更無去處。三科者、蔭・界・入。五陰者、色・受・想・行・識。十二入者、外六塵・內六門。六塵者、色・聲・香・味・觸・法。六門者、眼・耳・鼻・舌・身・意。各有一識。十八界者、六塵・六識、爲之十八。自性含萬法、名含藏識。若起思量、即是轉識。轉識生六識、出六門、見六塵。三六十八、由自性用。自性邪起、十八邪合、自性正起、十八正合。惡用即衆生、善用即是佛。用由何等。由自性對。解用即通一切法、自身是佛。

十一、十僧に教示し法を傳える門。ハ滅度の年月を附す。爾の時、師は門人の法海・志誠・法達・神會・智常・智通・志徹・志道・法珍・法如等を喚んで報じて言く、「吾が滅度の後、凡そ爲人の師は、改易する者多し。汝等十人、向前せよ。汝等は餘人と同じからず。吾が滅度の後は、各々一方の師と爲れ。吾れ今、汝に諸法を教えて、本宗を失わざらしめん。先ず須らく三科の法門・動用の三十六對・出沒即離の兩邊を擧ぐべし。一切法を

し雙を盡して、皆な對法を取れ。來去相因り、究竟の二法盡く除き、更に去處無からん。三科の法門とは、陰・界・入なり。陰は是れ五陰、界は是れ十八界、入は是れ十二入なり。何をか五陰と名づくる。色陰・受陰・想陰・行陰・識陰是れなり。何をか十八界と名づくる。六塵・六門・六識なり。何をか十二入と名づくる。外の六塵・内の六門なり。何をか六塵と名づくる。色・聲・香・味・觸・法是れなり。何をか六門と名づくる。眼・耳・鼻・舌・身・意是れなり。法性は六識、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識と六門・六塵を起す。自性の萬法を含むを名づけて含藏識と爲す。思量すれば即ち轉識して六識を生じ、六門を出だし、六塵を見る、是れ三六十八の用なり。自性の邪を起せば、十八の邪含み、自性の正を起せば、十八の正含む。悪用すれば即ち衆生、善用すれば即ち佛なり。用は何等にか由る。自性の對に由る。

七七 三十六對の法

(48) 外境無情對有五。天與地對・日與月對・暗與明對・陰與陽對・水與火對。語與言對(衍字)法與相對(與法)、有十二對。有爲無爲(有無爲)有色無色對・有相無相對・有漏無漏對・色與空對・動與靜對・清與濁對・凡與性對(聖)・僧與俗對・老與少對・大大與小小對・長與短對・高與下對。自性居起用對(衍字)、有十九對。邪與正對・癡與惠對・愚與智對・亂與定對・戒與非對・直與曲對・實與虛對・嶮與平對・煩惱與菩提對・慈與空對(毒)・喜與嗔對・捨與慳對・進與退對・生與滅對・常與無常對(衍字)・法身與色身對・化身與報身對・體與用對・性與相有清無親對(衍字)。言語

説くに、自性を離ること莫れ。忽し人有りて問わば、語を出だし雙を盡して、皆な對法を取れ。來去相因り、究竟の二法盡く除き、更に去處無からん。三科とは、陰・界・入なり。五陰とは、色・受・想・行・識なり。十二入とは、外の六塵・内の六門なり。六塵とは、色・聲・香・味・觸・法なり。六門とは、眼・耳・鼻・舌・身・意なり。各々に一識有り。十八界とは、六門・六塵・六識、之を十八と爲す。自性の萬法を含むを含藏識と名づく。若し思量を起せば即ち是れ轉識す。轉識すれば、六識を生じ、六門を出だし、六塵を見る。三六十八、自性の用に由る。自性の邪を起せば、十八の邪合し、自性の正を起せば、十八の正合す。悪用すれば即ち衆生、善用すれば即ち是れ佛なり。用は何等にか由る。自性の對に由る。用を解れば即ち一切法に通じ、自身は是れ佛なり。

(55) 外境無情五對△天地對・陰陽對・日月對・明暗對・水火對。▽。法相語言十二對△語法對・有爲無爲對・有色無色對・有漏無漏對・色空對・動靜對・清濁對・有相無相對・凡聖對・僧俗對・老若對・大小對。▽。自性起用十九對△長短對・邪正對・亂定對・戒非對・直曲對・癡惠對・愚智對・慈毒對・實虛對・險平對・煩惱菩提對・悲苦對・嗔喜對・捨慳對・進退對・生滅對・常無常對・法身色身對・化身報身對。都三十六對。▽。師言、此是三十六對法。若解用、即通貫一切經。出入即離

與法相有十二對、^(衍字)內外境有無(情)五對、^(自性起用有十九對)三身有三對、都合成三十六對法也。

此三十六對法、解用通一切經、出入即離兩邊。如何自性起用。三十六對(法)、共人言語、出外於(相)離相、入內於空離空。著空即惟長無名、^(明)著相惟(長)邪見。誘法直言不用文字。既云不用文字、大不合言語。言語即是文字。自性上說空、正語言、本性不空、^(自迷)迷自惑、語言除故。^(邪)暗不自暗、以名故暗。暗不自暗、以名變暗、以暗現明、來去相因。三十六對、亦復如是。

兩邊、自性動用。共人言語、外於相離相、內於空離空。若執全空、唯長無明、又却誘經言、不用文字。師曰、說法之人、口云不用文字、世人道者、盡不合言。正語之時、即是文字。文字上說空、本性不空。即是文字無邪正、即自大道、不立文字。只這不立兩字、即是文字。見人所說、便即誘他言著文字。汝等須知、自迷猶可、又誘佛經。不要誘經、罪障無數。著相於外、而求真戒、廣立道場、說有無之過患、如是之人、累劫不可見性、不勸依法修行。莫百物不思、於道自生質礙。若聽說不修、令人返生邪念。但能依法修行、常行無相法施。師言、汝等若悟、依此說、依此行、依此作、即不失本宗。若有人問汝義、問有將無答、問無將有答、問凡以聖對、問聖以凡對、問一邊將一邊對。二法相因、生中道義。教汝一問。餘問一依此作、三十六對法、即不失理也。吾今教汝一答。人問何名爲暗、答云、明是因暗、即緣暗有明、明沒即暗。但無明暗、以明顯暗、以暗現明、來去相因、成中道義。餘問悉皆如此。

*外^上外^下以下三十六對法ハ(金)(大)(興)(寬)ハ細字ナシ。マタ(興)(寬)ハ順序ヲ大イニ異ニスル(補?)。*語^上語^下與(金)(大)。*色^上色^下與(金)(大)。*動靜對清濁對有無相對凡聖對僧俗對^上有相無相對凡聖對僧俗對動靜對清濁對(金)(大)。*若^上若^下少(金)(大)。*直曲^上直^下曲(金)(大)。*嗔^上嗔^下瞋(金)(大)。*常^上常^下與(金)(大)。*三十六^上三十六^下ナシ(金)(大)。*經^上經^下法(興)(寬)。*空^上空^下若全著相即長邪見(興)(寬)。*執全^上執全^下全執(興)(寬)。*唯^上唯^下即(興)(寬)。*又却^上又却^下執空之人有(興)(寬)。*言^上言^下直言(興)(寬)。*師曰^上師曰^下說法之人^上ナシ(興)(寬)。*口^上口^下既(興)(寬)。*世人道者盡^上人亦(興)(寬)。*言^上言^下語言(興)(寬)。*正語之時即是文字文字上說空本性不空即是文字無邪正即自大道^上只此語言便是文字之相又云直道(興)(寬)。*文字^上文字文字(底)。*正^上正^下心(金)(大)。*只這^上只這^下即此(興)(寬)。*即^上即^下亦(興)(寬)。*而^上而^下作法(興)(寬)。*戒^上戒^下或(興)(寬)。*修^上修^下ナシ(底)。*行^上行^下行但只聽說修行又(興)(寬)。*於^上於^下而於(興)(寬)。*自生質^上自生質^下性空

(興)(寛)。*返||反(興)||及(寛)。*能||ナシ(興)(寛)。*常行無||無住(興)(寛)。*師言||ナシ(興)(寛)。*若||ナシ(底)。*答||對(興)(寛)。*答||對(興)(寛)。*問一||邊將一||邊對||ナシ(興)(寛)。*一||二(底)。*教汝一||問||汝一||問一||對(興)(寛)。*三十六對法||ナシ(興)(寛)。*吾今教汝一||答||設有(興)(寛)。*明||明明(金)。*即緣暗有明||是緣(興)(寛)。*暗||ナシ(金)(大)。*但無明暗||ナシ(興)(寛)。*問||問末(底)。

外境の無情の對に五有り。天と地との對・日と月との對・暗と明との對・陰と陽との對・水と火との對なり。語言と法相の對に十二對有り。有爲有色と無爲無色との對・有相と無相との對・有漏と無漏との對・色と空との對・動と靜との對・清と濁との對・凡と聖との對・僧と俗との對・老と少との對・大大と小小との對・長と短との對・高と下との對なり。自性の用を起す對に十九對有り。邪と正との對・癡と惠との對・愚と智との對・亂と定との對・戒と非との對・直と曲との對・實と虚との對・嶮と平との對・煩惱と菩提との對・慈と毒との對・喜と嗔との對・捨と悭との對・進と退との對・生と滅との對・常と無常との對・法身と色身との對・化身と報身との對・體と用との對・性と相との對なり。言語と法相に十二對有り、外境に無情の五對有り、自性の用を起すに十九對有り、都て合して三十六對の法を成すなり。

「此の三十六對の法は、解く用うれば、一切經に通じ、出入して即ち兩邊を離る。如何が自性が用を起す。三十六對法は、人と共に言語して、外に出でては相に於て相を離れ、内に入りては空に於て空を離る。空に著せば即ち惟だ無明を長じ、相に著せば惟だ邪見を長ず。法を謗つて直に文字を用いずと云う。「既に文字を用いずと云えば、人は合に言語すべからず。言語は即ち是れ文字なり。自性上に空と説き、正しく語言するも、本性は空ならざれば、自ら迷惑す、語言の邪なるが故なり。暗は自ら暗ならず、

外境の無情の五對とは、△天と地との對・陰と陽との對・日と月との對・明と暗との對・水と火との對なり。▽。法相の語言の十二對とは、△語と法との對・有爲と無爲との對・有色と無色との對・有漏と無漏との對・色と空との對・動と靜との對・清と濁との對・有相と無相との對・凡と聖との對・僧と俗との對・老と若との對・大と小との對なり。▽。自性の用を起す十九對とは、△長と短との對・邪と正との對・癡と智との對・戒と非との對・直と曲との對・癡と惠との對・愚と智との對・亂と定との對・實と虚との對・嶮と平との對・煩惱と菩提との對・慈と毒との對・喜と嗔との對・捨と悭との對・進と退との對・生と滅との對・常と無常との對・法身と色身との對・化身と報身との對なり。都て三十六對あり。▽。

師言く、「此れは是れ三十六對の法なり。若し解く用うれば、即ち一切經を通貫す。出入して即ち兩邊を離るるは、自性の動用なり。人と共に言語して、外は相に於て相を離れ、内は空に於て空を離る。若し全ての空に執せば、唯だ無明を長じ、又た却つて經を謗つて、文字を用いずと云う」。師曰く、「説法の人、口に文字を用いずと云うも、世人の道は、盡く合に言うべからず。正しき語の時は、便ち是れ文字なり。文字上に空を説くも、本性は空ならず。即ち是れ文字に邪正無く、即ち自ら大道にして、文字を立てず。只だ這の不立の兩字も即ち是れ文字なり。人の説く所を見

明を以ての故に暗なり。暗は自ら暗ならず、明を以て暗を變じ、暗を以て明を現して、來去相い因るのみ。三十六對も亦復た是の如し。

七八 壇經を稟受すべきこと

(49) 大師言、十弟子、已後傳法、迎相教授一卷壇經、不失本宗。不稟授壇經、非我宗旨。如今得了。遞代流行。得遇壇經者、如見吾親授。拾僧得教授已、寫爲壇經、遞代流行。得

て、便即ち彼の言は文字に著すと謗る。汝等は須らく知るべし、自ら迷うことは猶お可なるも、又た佛經を謗ることを。經を謗ることを要せざれ、罪障は無數なり。相に外に著して、而して眞戒を求め、廣く道場を立てて、有無の過患を説かば、是の如き人は、累劫にも見性すべからず、法に依つて修行するを勸めず。百物思わずして、道に於て自ら質礙を生ずること莫れ。若し説を聽いて修せずんば、人をして返つて邪念を生ぜしめん。但し能く法に依つて修行せば、常に無相の法施を行ぜん」。師言く、「汝等若し悟りて、此れに依つて説き、此れに依つて用い、此れに依つて行じ、此れに依つて作さば、即ち本宗を失せず。若し人有つて汝に、義を問わんに、有を問わば無を將つて答え、無を問わば有を將つて答え、凡を問わば聖を以て對え、聖を問わば凡を以て對え、一邊を問わば一邊を將つて對えよ。二法相い因つて、中道の義を生ぜせん。汝に一問を教う。餘問も一に此れに依つて作さば、三十六對法も即ち理を失せざるなり。吾れ今、汝に一答を教う。人ありて『何をか名づけて暗と爲す』と問わば、答えて云え、『明は是れ暗に因る、即ち暗に縁つて明有り、明没すれば即ち暗なり』と。但し明暗無くんば、明を以て暗を顯わし、暗を以て明を現わし、來去相い因つて、中道の義を成ず。餘の問いも悉く皆な此の如し」。

(56) 師教十僧已、報言、於後傳法、遞相教授壇經、即不失宗旨。汝今得了。遞代流行。後人得遇壇經、如親見吾。教示十僧、汝等抄取、代代流行。若看壇經、必當見性。

者必當見性。

* 已報言_レナシ(興)(寬)。* 遞相教授壇經_レ以壇經迭相教授(興)(寬)。* 今_レ今已(興)(寬)。* 得_レ得法(興)(寬)。* 見_レ承(興)(寬)。
* 示十僧汝等抄取代代流行_レナシ(興)(寬)。* 看_レ有(底)。

大師は十弟子に言く、「已後法を傳えて、_{たが}遞相_に一卷の『壇經』を教授し、本宗を失わざれ。『壇經』を稟受せざるは、我が宗旨に非ず。如今_い得_了る。遞代_{たが}に流行せよ。『壇經』に遇うことを得たる者は、吾れに親しく授けらるるが如し」。拾僧は教授を得_お已り寫して『壇經』と爲し、遞代に流行す。得る者は必ず當に見性すべし。

七九 眞假動靜の偈

(50) 大師先天二年八月三日滅度。七月八日喚門人告別。大

師(先) 天元年、於_新檀州國恩寺造塔、至先天二年七月告別。

大師言、汝衆近前。五_吾至八月、欲離世間。汝等有疑早問。爲

外_汝破疑、當令迷者盡。使與安樂。吾若去後、無入教與、法海

等衆僧聞已、涕淚悲泣。唯有神會、不動亦不悲泣。六祖言、

神會小僧、却得善(不善)等、毀譽不動。除者_餘不得。數年山

中、更修何道。汝今悲泣、更有_爲阿誰。憂吾不知去處。在若_吾不

知去處、終不別汝。汝等悲泣、即不知吾(去)處。若知去處、

即不悲泣。性聽_體無生無滅、無去無來。汝等盡坐。吾與如_汝(說)

一偈。(名)眞假動靜偈。與等盡誦取。見此偈意、汝(與)

吾(意)同。於此修行、不失宗旨。僧衆禮拜、請大師留偈、

敬心受_持特。偈曰、

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

師は十僧に教え已り、報して言く、「後に法を傳えて、_{たが}遞相_に『壇經』を教授し、即ち宗旨を失わざれ。汝は今、得_了る。遞代_{たが}に流行せよ。後人は『壇經』に遇うことを得ば、親しく吾れに見_まゆるが如し。十僧に教示す、汝等、抄取して、代代流行せよ。若し『壇經』を看ば、必ず當に見性すべし」。

(57) 大師先天元年、於新州國恩寺造塔。至二年七月八日、

喚門人告別。師言、汝等近前。吾至八月、欲離世間。汝等有

疑、早須相問。爲汝_汝破疑、當令迷盡。使汝安樂。吾若去後、

無人教汝。法海等聞、悉皆涕泣。唯有神會、不動神情、亦無

涕泣。師曰、神會小師、却善不善等、毀譽不動、餘者空得數

年在山、修行何道。汝今悲泣、爲憂阿誰。若憂不知去處、吾

自知去處。吾若不知去處、終不別汝等。汝等悲泣、爲不知吾

去處。知吾去處、不合悲泣。法性體無生滅去來。汝等盡坐。

吾與汝等說一偈。名曰眞假動靜。汝等誦取此偈、與吾意同。

依此修行、不失宗旨。衆僧作禮、請師說偈。

一切無有眞、不以見於眞。

若見衣眞者、是見盡非眞。

若能自有眞、離假卽心眞。

自心不離假、無眞何處眞。

有情卽解動、無性卽不動。

若修不動行、同無情不動。

若見眞不動、動上有不動。

不動是不動、無情無佛衆。

能善分別相、第一義不動。

若悟作此見、則是眞如用。

報諸學道者、努力須用意。

莫於大乘門、却執生死智。

前頭人相應、卽共論佛語。

若實不相應、合掌令勸善。

此教本無諍、無諍失道意。

執迷諍法門、自性入生死。

*師||師以(興)(寬)。*喚||喚(金)。*告||ナシ(底)。*汝||ナシ(底)。*使||便(底)。*安||ナシ(底)。*法||ナシ(底)。*却||却得(興)(寬)。*毀||假(寬)。*空||不(興)(寬)。*憂||憂吾(興)(寬)。*處||ナシ(底)(金)(大)。*等||ナシ(興)(寬)。*汝等||ナシ(金)。*爲||蓋爲(興)(寬)。*知||若知(興)(寬)。*去||居(寬)。*處||處卽(興)(寬)。*合||ナシ(底)。*體||本(興)(寬)。*盡||ナシ(底)。*說||ナシ(底)(興)(寬)。*靜||靜偈(興)(寬)。*偈||偈偈曰(興)||偈曰(寬)。*非||心(興)(寬)。*第||弟(大)。*是||此(興)(寬)。*眞如||如眞(金)(大)。*努||奴(寬)。*自||須(興)(寬)。

大師は、先天二年八月三日滅度す。七月八日、門人を喚んで別を告ぐ。大師は先天元年、新州國恩寺に塔を造り、先天二年七月

一切無有眞、不以見於眞。

若見於眞者、是見盡非眞。

若能自有眞、離假卽非眞。

自心不離假、無眞何處眞。

有情卽解動、無情卽不動。

若修不動行、同無情不動。

若見眞不動、動上有不動。

不動是不動、無情無佛種。

能善分別相、第一義不動。

但作如是見、卽是眞如用。

報諸學道人、努力自用意。

莫於大乘門、却執生死智。

若言下相應、卽共論佛義。

若實不相應、合掌令歡喜。

此宗本無諍、諍卽失道意。

執迷諍法門、自性入生死。

大師は先天元年、新州國恩寺に塔を造る。二年七月八日に至つて、門人を喚んで別を告ぐ。師言く、「汝等、近前せよ。吾れは

に至って別を告げしなり。大師言く、「汝衆、近前せよ。吾れは八月に至って、世間を離れんと欲す。汝等疑い有らば早く問え。汝が爲に疑を破し、當に迷える者をして盡くさしむべし。汝をして安樂ならしめん。吾れ若し去かん後は、人の汝に教うるもの無からん」。法海等の衆僧は、聞き已りて涕淚悲泣す。唯だ神會のみ有って動ぜず、亦た悲泣せず。六祖言く、「神會小僧は却って得たり、善と不善と等しく、毀譽に動ぜず。餘者は得ず。數年も山中にて、更に何の道をか修せし。汝は今、悲泣して、爲た阿誰をか憂うる。吾れが去く處を知らざるを憂うるか。吾れ若し去く處を知らずんば、終に汝に別れじ。汝等の悲泣するは、即ち吾が去く處を知らざるなり。若し去く處を知らば、即ち悲泣せず。性體は生無く滅無く、去無く來無し。汝等盡く坐せよ。吾れは汝の與に一偈を説かん。眞假動靜の偈と名づく。汝等盡く誦取せよ。此の偈意を見れば、汝は吾が意と同ぜん。此に依って修行して、宗旨を失わざれ」。僧衆は禮拜して、大師の偈を留めんことを請い、敬心に受持す。偈に曰く、

一切、眞有ること無し、以て眞を見ざれ。

若し眞を見れば、是の見盡く眞に非ず。

若し能く自ら眞有れば、假を離れて心に即して眞なり。

自心は假を離れず、眞無くんば何れの處か眞ならん。

有情は即ち解く動くも、無情は即ち動ぜず。

若し不動の行を修せば、無情の不動に同じ。

若し眞の不動を見れば、動上に不動有り。

不動は是れ不動なり、無情は佛種無し。

能善く相を分別して、第一義は動ぜず。

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

八月に至って、世間を離れんと欲す。汝等疑い有らば、早く須らく相い問うべし。汝が爲に疑を破し、當に迷いをして盡くさしむべし。汝をして安樂ならしめん。吾れ若し去かん後は、人の汝に教うるもの無からん」。法海等は聞いて、悉く皆な涕泣す。唯だ神會のみ有って、神情を動ぜず、亦た涕泣すること無し。師曰く、「神會小師は却って善と不善と等しく、毀譽に動ぜず、餘の者は空しく數年も山に在るを得て、何の道をか修行せし。汝は今、悲泣して、爲た阿誰をか憂うる。若し去く處を知らざるを憂えば、吾れは自ら去く處を知る。吾れ若し去く處を知らずんば、終に汝等に別れじ。汝等の悲泣するは、吾が去く處を知らざるが爲ならん。吾が去く處を知らば、合に悲泣すべからず。法性の體は生滅去來無し。汝等盡く坐せよ。吾れは汝等の與に一偈を説かん。名づけて眞假動靜と曰う。汝等、此の偈を誦取すれば、吾が意と同ぜん。此に依って修行して、宗旨を失わざれ」。衆僧は作禮して、師の偈を説かんことを請う。

一切、眞有ること無し、以て眞を見ざれ。

若し眞を見れば、是の見盡く眞に非ず。

若し能く自ら眞有れば、假を離れて即ち眞に非ず。

自心は假を離れず、眞無くんば何れの處か眞ならん。

有情は即ち解く動くも、無情は即ち動ぜず。

若し不動の行を修せば、無情の不動に同じ。

若し眞の不動を覓めば、動上に不動有り。

不動は是れ不動なり、無情は佛種無し。

能善く相を分別して、第一義は動ぜず。

若し此の見を作すことを悟れば、則ち是れ眞如の用なり。諸々の學道の者に報ず、努力して須らく意を用うべし。大乘の門に於て、却つて生死の智に執すること莫れ。前頭に人相應せば、即ち共に佛語を論ぜん。若し實に相應せずんば、合掌して歡喜せしめよ。此の教は本より諍い無し、諍わば即ち道意を失す。迷いに執して法門を諍わば、自性は生死に入らん。

八〇 傳衣と六代祖師の傳法偈

(51) 衆僧既聞、識大師意、更不敢諍。依法修行、一時禮拜。即之(知)大師不永住世。上座法海向前言大師、大師去後、衣法當付何人。大師言、法即付了、汝不須問。吾滅後二十餘年、邪法遼亂、惑我宗旨。有人出來、不惜身命、弟佛(定)教是非、豎立宗旨。即是吾正法。衣不合(傳)轉。汝不信、吾與誦先代五祖傳衣付法誦(頌)。若據第一祖達摩頌意、即不合傳衣。聽五與汝頌。頌曰、

第一祖達摩和尚頌曰、
吾大來唐國、傳(教)救(迷情)名清。
一花開五葉、結菓自然成。

第二祖惠可和尚頌曰、
本來緣有地、從地種花生。
當本願(元)無地、花從何處生。

第三祖僧璨和尚頌曰、

但し此の如き見を作さば、即ち是れ眞如の用なり。諸々の學道の人に報ず、努力して自ら意を用いよ。大乘の門に於て、却つて生死の智に執すること莫れ。若し言下に相應せば、即ち共に佛義を論ぜん。若し實に相應せずんば、合掌して歡喜せしめよ。此の宗は本より諍い無し、諍わば即ち道意を失す。迷いに執して法門を諍わば、自性は生死に入らん。

(58) 時衆僧聞、知大師意、更不敢諍。各自攝心、依法修行、一時禮拜。即知大師不久住世。法海上座問曰、和尚去後、衣法當付何人。師言、吾於大梵寺說法、直至今日。抄錄流行、名法寶壇經。汝等守護、度諸羣生。但依此說、是眞正法。師言、法海向前。吾滅度後、二十年間、邪法(定)遼亂、惑我正宗。有一南陽縣人出來、不惜身命、定於佛法、豎立宗旨。即是吾法弘於河・洛、此教大行。師曰、汝今須知、衣不合傳。汝若不信、吾與汝說先聖達磨大師傳衣偈。據此偈意、衣不合傳。汝聽。偈曰、
吾本來東土、說(法)救(迷情)。
一花開五葉、結果自然成。

花種雖因地、地上種^(花)化生。

花種無生性、於地亦無生。

第四祖道信和尚頌曰、

花種有生性、因地種花生。

先緣不和合、一切盡無生。

第五祖弘忍和尚頌曰、

有情來下種、無情花即生。

無情又無種、心地亦無生。

第六祖惠能和尚頌曰、

心地含情種、法雨即花生。

自吾^(悟)花情種、菩提菓自成。

*言||曰(興)(寬)。*直||真(底)。*壇經||記(底)||壇經記(興)(寬)。*繚||擦(興)(寬)。*南陽縣||ナシ(興)(寬)。*豎||堅(金)(大)。
*師曰汝今須知||若非此人(興)(寬)。*若||多(興)(寬)。*聖||祖(興)(寬)。*衣||法(寬)。*偈||偈頌(興)(寬)。*偈||頌(底)||偈頌
之(興)(寬)。*汝聽||ナシ(興)(寬)。*說||校合ハ、「傳」トアル(大)。*果||菓(金)。*亦||ナシ(底)||還(興)(寬)。*意||意偈曰(興)
(寬)。*心||一(底)。*種性||諸種(寬)。*已||意(金)(大)。*果||菓(金)。

衆僧は既に聞いて、大師の意を識り、更に敢えて諍わす。法に依って修行せんとして、一時に禮拜す。即ち大師の永く世に住まらざることを知る。上座法海、向前して大師に言く、「大師去きて後、衣法は當に何人にか付す」。大師言く、「法は即ち付し了る。汝は問うことを須いず。吾が滅後二十餘年、邪法遼亂して、我が宗旨を惑わさん。人有って出で來たり、身命を惜まず、佛教の是非を定めて、宗旨を堅立せん。即ち是れ吾が正法なり。衣は合に傳うべからず。汝信ぜざれば、吾れ與に先代五祖の傳衣付法頌を

師曰、吾有一偈、亦用先聖大師偈意。
心地含情種、法雨即花生。
頓悟花情已、菩提菓自成。

時に衆僧は聞いて、大師の意を知り、更に敢えて諍わす。各々自ら心を攝めて、法に依って修行せんとして、一時に禮拜す。即ち大師の久しく世に住まらざることを知る。法海上座、問うて曰く、「和尚去きて後、衣法は當に何人にか付す」。師言く、「吾れ大梵寺に於て說法して、直に今日に至る。抄録し流行して、『法寶壇經』と名づく。汝等は守護して、諸々の羣生を度せよ。但だ此れに依って説かば、是れ眞の正法なり」。師言く、「法海よ向前せよ。吾が滅度の後、二十年間、邪法遼亂して、我が正宗を惑わさ

誦せん。若し第一祖達摩の頌の意に據らば、即ち合まに衣を傳うべからず。聽け、吾れ汝が與に頌じゆせん」。頌に曰く、

第一祖達摩和尚の頌に曰く、
吾れ本はめて唐國に來り、教を傳えて迷情を救う。

一花は五葉に開き、菓を結んで自然に成ず。

第二祖惠可和尚の頌に曰く、

本來地有るに縁り、地より種花生ず。

當本元もより地無くんば、花は何れの處より生ぜん。

第三祖僧璨和尚の頌に曰く、

花種は地に因より、地上に種花は生ずと雖も、

花種に生性無くんば、地に於ても亦た無生なり。

第四祖道信和尚の頌に曰く、

花種は生性有り、地に因りて種花生ず。

先に縁和合せずんば、一切盡く無生なり。

第五祖弘忍和尚の頌に曰く、

有情來りて種を下し、無情に花即ち生ず。

無情は又た種無し、心地も亦た無生なり。

第六祖惠能和尚の頌に曰く、

心地は情種を含み、法雨に即ち花生ず。

自ら花の情種を悟り、菩提菓自ずから成ず。

八一 重ねて二頌を説く

(52) 能大師言、汝等聽吾作二頌、取達摩和尚頌意。汝迷人依此頌修行、必當見性。

第一頌曰、

一南陽縣人有つて出で來たり、身命を惜まず、佛法を定めて、宗旨を豎立せん。即ち是れ吾が法、河・洛かに弘まり、此の教え大に行われん」。師曰く、「汝、今、須らく知るべし、衣は合まに傳うべからず。汝若し信ぜざれば、吾れ汝が與たに先聖達磨大師の傳衣の偈を説かん。此の偈の意に據らば、衣は合まに傳うべからず。汝、聽け。」偈に曰く、

吾れ本はめて東土に來り、法を説きて迷情を救う。

一花は五葉に開き、菓を結んで自然に成ず。

師曰く、「吾れに一偈有り。亦た先聖大師の偈の意を用う」。

心地は種性を含み、法雨に即ち花生ず。

頌に花情を悟りわり曰り、菩提の果自ずから成ず。

(59) 師説偈已、令門人散*。衆相謂曰、大師多不久住世間。

心地邪花放、五葉逐根隨。
共造無明業、見被業風吹。

第二頌曰、

心地正花放、五葉逐根隨。
共修般若惠、當來佛菩提。

六祖說偈已了、放衆生散。門人出外思惟、即知大師不久住世。

*人||人且(興)(寛)。*多||多應(興)(寛)。

能大師言く、「汝等、吾れ二頌を作りて、達摩和尚の頌の意を取れるを聴け。汝ら迷人、此の頌に依って修行せば、必ず當に見性すべし」。

第一の頌に曰く、

心地に邪花放ち、五葉は根を逐うて隨う。

共に無明の業を造りて、見業風に吹かる。

第二の頌に曰く、

心地に正花放ち、五葉は根を逐うて隨う。

共に般若の惠を修して、佛菩提を當來す。

六祖は偈を説くこと已に了り、衆生を放ちて散ぜしむ。門人は外に出て思惟して、即ち大師の久しく世に住まらざることを知る。

八二 西天東土の祖統説

(53) 六祖後至八月三日、食後、大師言、汝等善位座。五今

共與等別。法海問言、此頓教法傳授、從上已來至今幾代。六

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

師は偈を説き已って、門人をして散ぜしむ。衆相い謂って曰く、「大師は多て久しく世間に住まらざらん」。

(60) 師至先天二年八月三日、食後報言、汝等各著位坐。今

共汝別。時法海問言、此法從上至今、傳授幾代。願和尚説。

祖言、

初傳受、^(授)七佛、釋迦牟尼佛第七、

大迦葉第八、

阿難第九、

末田地^(末)第十、

商那和修第十一、

優婆掬^(掬)第十二、

提多迦第十三、

佛陀難提第十四、

佛陀蜜多第十五、

脇比丘第十六、

富那奢第十七、

馬鳴第十八、

毗羅長者第十九、

龍樹第二十、

迦那提婆第二十一、

羅睺羅第二十二、

僧伽那提第二十三、

僧伽那^(耶)舍第二十四、

鳩摩羅駄第二十五、

闍耶多第二十六、

婆修槃多第二十七、

師曰、

初六佛、釋迦^(第七)、

迦葉、

阿難、

末田地^{*}、

商那和修、

優波掬^{*}、

提多迦^{*}、

佛陀難提、

伏駄蜜多^{*}、

脇尊者^{*}、

富那夜奢^{*}、

馬鳴^{*}、

毗羅尊者^{*}、

龍樹^{*}、

迦那提多、

羅睺羅多、

僧伽那提^{*}、

僧伽耶舍^{*}、

鳩摩羅駄^{*}、

闍耶多^{*}、

婆修槃頭^{*}、

摩拏羅第廿八、

鶴勒那第廿九、

師子比丘第卅、

舍那婆斯第卅一、

優婆堀第卅二、

僧迦羅 第三十三、

須婆蜜多 第三十四、

南天竹國王子第三子菩提達摩 第三十五、

唐國僧惠可 第三十六、

僧璨 第三十七、

道信 第三十八、

弘忍 第三十九、

大師言、今日已後迎相傳受、須有依約。莫失宗旨。

摩拏羅、

鶴勒那、

師子比丘、

舍那婆斯、

優波掘多、

婆須蜜多、

僧迦羅又、

菩提達磨、

北齊惠可、

唐僧璨、

唐道信、

唐弘忍、

吾今惠能。師曰、吾今付法於汝。汝等於後遞相傳授、須有稟承依約。莫失宗旨。

*三||二(金)(大)。*今||ナシ(興)(寬)。*別||相別(興)(寬)。*言||曰(金)(大)||云(寬)。*從||徒(金)。*授||ナシ(底)||受(金)

(大)。*第||弟(大)。*末田地||ナシ(金)(大)。*掬||掬(興)(寬)。*迦||迦彌遮迦尊者波須密多(大)。*伏駄||佛陀(興)(寬)。*尊者

比丘(興)(寬)。*夜||ナシ(興)(寬)。*鳴||鳥(底)||鳴大士(興)(寬)。*毗||迦毗(大)。*樹||樹大士(興)(寬)。*堤||多(底)。*伽

迦(金)(大)。*耶舍||那舍(底)。*鳩||九(底)。*闍||奢(金)(大)。*耶||那(底)||夜(興)(寬)。*婆||波(底)。*舍那婆斯||奢那婆

斯(金)||婆舍斯多(興)(寬)(大)。*優波掘多婆須蜜多僧迦羅又||不如密多般若多羅(大)。*蜜||密(金)。*菩||後魏||菩(興)(寬)。*

唐||隋朝(興)(寬)。*唐||唐朝(興)(寬)。*唐||ナシ(興)(寬)。*吾今||ナシ(興)(寬)。*吾今付法於汝||衆人今當受法(興)(寬)。*遞

||通(金)。*授||付(興)(寬)。*依||衣(底)(金)(大)。六祖、後に八月三日に至り、食後に、大師言く、「汝等、位に 師は先天二年八月三日に至り、食後に報じて言く、「汝等、各

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

著いて坐せよ。吾れ今、汝等と別れん」。法海、問うて言く、「此の頓教の法の傳授は、從上已來、今に至りて幾代ぞ」。六祖言く、「初めに七佛より傳授して、釋迦牟尼佛第七、大迦葉第八、阿難第九、末田地第十、商那和修第十一、優婆掬多第十二、提多迦第十三、佛陀難提第十四、佛陀蜜多第十五、脇比丘第十六、富那奢第十七、馬鳴第十八、毗羅長者第十九、龍樹第二十、迦那提婆第二十一、羅睺羅第二十二、僧迦那提第二十三、僧迦耶舍第二十四、鳩摩羅第二十五、闍耶多第二十六、婆修盤多第二十七、摩拏羅第二十八、鶴勒那第二十九、師子比丘第三十、舍那婆斯第三十一、優婆掘第三十二、須婆蜜多第三十三、僧迦羅叉第三十四、南天竺國王王子第三子菩提達摩第三十五、唐國僧惠可第三十六、僧璨第三十七、道信第三十八、弘忍第三十九、惠能自身當今受法して第四十なり」。大師言く、「今日より已後、遞相に傳授して、須らく依約有るべし。宗旨を失うこと莫れ」。

八三 見眞佛解脫の頌

(54) 法海又白、大師今去、留付何法、今後代人、如何見佛。六祖言、汝聽、後代迷人、但識衆生、即能見佛。若不識衆生、覓佛萬劫、不得見也。五今教汝識衆生見佛、更留見眞佛解脫頌。迷即不見佛、悟者即見。法海願聞、代代流傳、世世不絕。六祖言、汝聽、吾汝與說。後代世人、若欲覓佛、但識佛心衆生、即能識佛。

即像有衆(生)、離衆生無佛心。
迷即佛衆生、悟即衆生佛。

々位に著いて坐せよ。今、汝と別れん」。時に法海問うて言く、此の法は上より今に至るまで、傳授せること幾代ぞ。願わくは和尚、説きたまえ。師曰く、「初め六佛、釋迦八第七、迦葉、阿難、末田地、商那和修、優波掬多、提多迦、佛陀難提、伏駄蜜多、脇尊者、富那夜奢、馬鳴、毗羅長者、龍樹、迦那提多、羅睺羅多、僧迦那提、僧迦耶舍、鳩摩羅、闍耶多、婆修槃多、摩拏羅、鶴勒那、師子比丘、舍那婆斯、優波掘多、婆須蜜多、僧迦羅叉、菩提達磨、北齊惠可、唐僧璨、唐道信、唐弘忍、吾れ今、惠能なり」。師曰く、「吾れ今、汝らに付法す。汝等は後に遞相に傳授し、須らく裏承依約有るべし。宗旨を失うこと莫れ」。

(61) 法海白言、和尚、留何教法、今後代迷人、得見自性。師言、汝聽、後代迷人、若識衆生、即見佛性。若不識衆生、萬劫覓佛難逢。吾今教汝識自心衆生、見自心佛性。汝志心聽、吾與汝說。後代之人、欲求見佛、但識衆生。師曰、只爲衆生迷佛、非是佛迷衆生。自性若悟、衆生是佛。自性若迷、佛是衆生。自性平直、衆生是佛。自性邪險、佛是衆生。師言、法海、汝等心若險曲、即佛在衆生中。一念平直用心、即是衆生成佛。我心自有佛、自若無佛心、何處求真佛。

愚癡佛衆生、智惠衆生佛。

心劔佛衆生、平等衆生佛。

一生心若劔、佛在衆生中。

一念吾若平、即衆生自佛。

我心自有佛、自佛是真佛。

自若無佛心、向何處求佛。

* 白||曰(底)。* 汝聽||汝等聽之(興)(寬)。* 佛||ナシ(底)。* 汝志心聽||ナシ(興)(寬)。* 師曰||ナシ(興)(寬)。* 直||等(興)(寬)。
* 性||心(興)(寬)。* 險||儉(金)(大)。* 師言法海||ナシ(興)(寬)。* 用心||ナシ(興)(寬)。* 即||ナシ(底)。* 佛||佛汝等自心是佛更
莫狐疑外無一切物而能建立皆是本心生萬種法故經云心生種種法生心滅種種法滅(興)(寬)。

法海、又た白す、「大師は今、去くに、何の法を留付して後代の人をして如何が佛を見せしむるや」。六祖言く、「汝聽け、後代の迷人、但し衆生を識らば、即ち能く佛を見ん。若し衆生を識らずんば、佛を覓むること萬劫ならんも見んことを得ず。吾れ今、汝をして衆生を識つて佛を見せしめ、更に『見眞佛解脫頌』を留む。迷えば即ち佛を見ず、悟れば即ち見ん」。法海、聞いて代代流傳し、世世絶せざらんと願う。六祖言く、「汝聽け、吾れ汝の與に説かん。後代の世人、若し佛を覓めんことを欲せば、但だ自心の衆生を識れ、即ち能く佛を識らん」。

佛に即して衆生有り、衆生を離れて佛無し。

迷えば即ち佛も衆生、悟れば即ち衆生も佛。

愚癡なれば佛も衆生、知惠なれば衆生も佛。

心險なれば佛も衆生、平等なれば衆生も佛。

一生、心若し險なれば、佛は衆生の中に在り。

一念、心若し平なれば、即ち衆生自ずから佛なり。

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

法海白して言く、「和尚は何の教法をか留めて後代の迷人をして自性を見ることを得しむるや」。師言く、「汝聽け、後代の迷人、若し衆生を識らば、即ち佛性を見ん。若し衆生を識らずんば、萬劫に佛を覓むるも逢い難し。吾れ今、汝をして自心の衆生を識り、自心の佛性を見せしめん。汝、志心に聽け、吾れ汝の與に説かん。後代の人、佛を見んことを欲せば、但だ衆生を識れ」。師曰く、「只だ衆生の佛に迷うと爲し、是れ佛の衆生に迷うに非ざるなり。自性若し悟らば、衆生は是れ佛なり。自性若し迷わば、佛は是れ衆生なり。自性平直ならば、衆生は是れ佛なり。自性邪險なれば、佛は是れ衆生なり」。師言く、「法海よ、汝等心若し險曲なれば、即ち佛は衆生の中に在り。一念平直にして心を用うれば、即ち是れ衆生は佛と成る。我が心に自ずから佛有り。自ら若し佛心無くば、何れの處にか眞佛を求めん」。

法海、又た白す、「大師は今、去くに、何の法を留付して後代の人をして如何が佛を見せしむるや」。六祖言く、「汝聽け、後代の迷人、但し衆生を識らば、即ち能く佛を見ん。若し衆生を識らずんば、佛を覓むること萬劫ならんも見んことを得ず。吾れ今、汝をして衆生を識つて佛を見せしめ、更に『見眞佛解脫頌』を留む。迷えば即ち佛を見ず、悟れば即ち見ん」。法海、聞いて代代流傳し、世世絶せざらんと願う。六祖言く、「汝聽け、吾れ汝の與に説かん。後代の世人、若し佛を覓めんことを欲せば、但だ自心の衆生を識れ、即ち能く佛を識らん」。

我が心に自ら佛有り、自佛是れ眞佛なり。
自ら若し佛心無くんば、何れの處に向てか佛を求めん。

八四 自性眞佛解脫の頌

(55) 大師言、汝等門人好住。吾留一頌、名自性眞佛解脫頌。後代迷(人)、門此頌意(衍字)、意即見自心自性眞佛。與汝此頌、吾共汝別。頌曰、

眞如淨性是眞佛、邪見三毒是眞魔。
邪見之人魔在舍、正見知人佛則過。
性衆邪見三毒生、即是魔王來住舍。
正見忽則三毒生、魔變成佛眞無假。
化身報身及淨身、三身元本是一身。
若向身中覓自見、即是(成)佛菩提因。
本從花身生淨性、淨生常在化身中。
性使化身行正道、當來員(圓)滿眞無窮。
姪性本身清淨因、除姪即無淨性身。
性中但自離(五)吾欲、見性利那即是眞。
今生若吾頓教門、悟即眼前見性尊。
若欲修行云覓佛、不知何處欲求真。
若能身中自有眞、有眞即是成佛因。
自不求眞外覓佛、去覓總是大癡人。
頓教法者是西流、求度世人須自修。

(62) 吾今留一偈、與汝等別、名自性眞佛偈。後代迷人、識此偈意、自正本心、自成佛道。偈曰、

*眞如性淨是眞佛、邪見三毒是魔王。
邪迷之時魔在舍、正見之時佛在堂。
性中邪見三毒生、即是魔王來住舍。
正見自除三毒心、魔變成佛眞無假。
法身報身及化身、三身本來是一身。
若向性中能自見、即是成佛菩提因。
*本從化身生淨性、淨性常在化身中。
性使化身行正道、當來性*智更*無窮。
姪性本是淨性因、除姪即無淨性身。
性中各自離五欲、見性利那即是眞。
今生若悟頓法門、忽見*自性現*世尊。
汝等修行覓作佛、自性自見正中眞。
若能心中自見眞、有眞即是成佛因。
不見自性外覓佛、起心總是大癡人。
頓教法門今已留、救度世人須自修。

今保世(報)聞學道者、不於此(依)是大悠悠。

* 正||見(興)寬()。 * 自成佛道偈曰||成佛(金)大()。 * 眞||「眞」以下一帖缺ク(大)。 * 來||表(底)。 * 魔||磨(底)。 * 本從||從本(底)金()。 * 淨||即(底)。 * 性智更||圓滿眞(興)寬()。 * 更||便(金)。 * 見||悟(興)寬()。 * 現||見(興)寬()。 * 等||若(興)寬()。 * 自性自見正中眞||不知何處擬求真(興)寬()。 * 自見||見自(底)。

大師言く、「汝等門人、好く住せよ。吾れ一頌を留めん、『自性眞佛解脫頌』と名づく。後代の迷人、此の頌の意を聞かば、即ち自心自性の眞佛を見ん。汝に此の頌を與えて、吾れ汝と別れん」。頌に曰く、

眞如の淨性は是れ眞佛、邪見の三毒は是れ眞魔なり。

邪見の人は、魔、舎に在り、正見の人は、佛則ち過ぐ。

性中邪見なれば三毒生じ、即ち是れ魔王來つて舎に住す。

正見なれば忽ち三毒の心を除き、魔は變じて佛と成りて、眞にして假無し。

化身と報身及び法身と、三身は元本もとより是れ一身なり。

若し身中に向かつて覓めて自ら見れば、即ち是れ成佛菩提の因なり。

本もとより化身に從つて淨性を生ず、淨性は常に化身の中に在り。

性は化身をして正道を行ぜしめ、當來に圓滿にして眞に窮まり無し。

姪性の本身、清淨の因にして、姪を除けば、即ち淨性の身無し。

性中但し自ら五欲を離れば、見性して刹那に即ち是れ眞なり。今生に若し頓教の門を悟らば、悟るとき即ち眼前に世尊を見ん。

報汝當來學道者、不作此見大悠悠。

「吾れ今、一偈を留めて、汝等と別れん、『自性眞佛偈』と名づく。後代の迷人、此の偈の意を識らば、自ら本心を正し、自ら佛道を成ぜん」。偈に曰く、

眞如の性淨は是れ眞佛、邪見の三毒は是れ眞魔なり。

邪迷の時、魔は舎に在り、正見の時、佛は堂に在り。

性中邪見なれば三毒生じ、即ち是れ魔王來つて舎に住す。

正見なれば自ずから三毒の心を除き、魔は變じて佛と成りて眞にして假け無し。

法身と報身及び化身と、三身は本來是れ一身なり。

若し性中に向かつて能く自ら見れば、即ち是れ成佛菩提の因なり。

本もとより化身に從つて淨性を生ず、淨性は常に化身の中に在り。

性は化身をして正道を行ぜしめ、當來に性智にして更に窮まり無し。

姪性は本より是れ淨性の因にして、姪を除けば、即ち淨性の身無し。

性中各自に五欲を離れば、見性して刹那に即ち是れ眞なり。今生に若し頓法の門を悟らば、忽ち自性を見て世尊を現わさん。

若し修行して云に佛を覓めんと欲せば、知らず、何れの處にか眞を求めんと欲する。

若し能く身中に自ら眞有れば、眞有ること即ち成佛の因なり。

自ら眞を求めずして外に佛を覓むれば、覓め去ること總に是れ大癡人なり。

頓教の法は、是れ西に流る、世人を度せんと求むれば、須らく自ら修すべし。

今、世間の學道者に報ず、此に依らざるは是れ大いに悠悠たり。

八五 遺誠と入滅

(56) 大師説偈已了。遂告門人曰、汝等好住。今共汝別。吾去已後、莫作世情悲泣。而受人弔門(問)錢帛、著孝衣、即非聖法、非我弟子。如吾在日一種、一時端坐。但無動無淨(靜)、無生無滅、無去無來、無是非、無住(住)(無往)、但然寂淨(靜)、即是大道。吾去已後、但衣法修行、共吾在日一種。吾若在世、汝違教法、吾住無益。大師云此語已、夜至三更、奄然遷化。大師春秋七十有六。

*受||時受(金)。*弔||吊(興)。*無||「無」マデ缺ク(大)。*汝||ナシ(底)(金)(大)。*有||ナシ(金)。

大師、偈を説き已了る。遂に門人に告げて曰く、「汝等、好く住せよ。今、汝と別れん。吾れ去きて已後、世情の悲泣を作すこと莫れ。人の弔問(ちやうもん)錢帛を受け、孝衣(こうえ)を著くるは、即ち聖法に非ず、我が弟子に非ず。吾が在日の如くに一種にして、一時に端坐

汝等修行して作佛を覓めば、自性に自ら正中の眞を見る。

若し能く心中に自ら眞を見れば、眞有ること即ち是れ成佛の因なり。

自性を見ずして外に佛を覓め、心を起すは總に是れ大癡人なり。

頓教の法門、今、已に留む、世人を救度して須らく自ら修すべし。

汝ら當來の學道の者に報ず、此の見を作さずんば大いに悠悠たり。

(63) 師説偈了、報言、今共汝別。吾滅度後、莫作世情、悲泣雨淚。受人弔問、身著孝服、非吾弟子、亦非正法。但如吾在日、一時盡坐。無動無靜、無生無滅、無去無來、無是非、無住無往、無名無字。恐汝心迷不會吾意、吾今再囑汝、令汝見性。吾滅度後、依此修行、如吾在日。汝等違法、縱吾在世、終無有益。大師言訖、夜至三更、奄然遷化。大師春秋七十有六。

*師||は偈を説き了つて、報じて言く、「今、汝と別れん。吾が滅

度の後、世情を作して悲泣雨淚すること莫れ。人の弔問を受け、身に孝服を著くるは、吾が弟子に非ず、亦た正法にも非ず。但だ吾が在日の如く、一時に盡く坐せ。動無く靜無く、生無く滅無

せよ。但し動無く静無く、生無く滅無く、去無く來無く、是無く非無く、住無く往無く、坦然寂靜たらば、即ち是れ大道なり。吾れ去きて已後、但し法に依って修行せば、吾が在日と一種なるが如し。吾れ若し世に在るとも、汝、教法に違わば、吾れ住するごと益無し」。大師は此の語を云い已り、夜三更に至って、奄然として遷化す。大師、春秋は七十有六。

八六 滅後の奇瑞など

(57) 大師滅度諸日、寺内異香氤氳、經數日不散。山用地動、林木變白、日月無光、風雲失色。八月三日滅度。至十一月、迎和尚神座、於曹溪山葬、在龍龕之内、白光出現、直上衝天、二日始散。韶州刺史韋處立碑、至今供養。

* 香||香氣(金)。* 得山崩||ナシ(興)(寬)。* 林||草(底)。* 木||ナシ(興)(寬)。* 天地||風雲(興)(寬)。* 叫||悲(金)(大)。* 述||「述」ノ下ニ割注アリ(興)(寬)。(補8)。* 養||「養」ノ下ニ追記アリ(興)(寬)(補9)。
大師滅度の日、寺内に異香氤氳として、數日を経るも散ぜず。山は崩れ地は動き、林木は變白し、日月は光無く、風雲は色を失う。八月三日、滅度す。十一月に至りて、和尚の神座を曹溪山に迎えて葬るに、龍龕の内に在りて、白光出現し、直上して天を衝き、二日にして始めて散ず。韶州刺史韋處、碑を立て、今に至って供養す。

く、去無く來無く、是無く非無く、住無く往無く、名無く字無し。汝が心迷いて吾が意を會せざらんことを恐れて、吾れ今、再び汝に囑して、汝をして見性せしむ。吾が滅度の後は、此れに依って修行せば、吾が在日の如くならん。汝等法に違わば、縦い吾れ世に在るとも、終に益有ること無し」。大師は言い訖って、夜三更に至って、奄然として遷化す。大師、春秋は七十有六。

(64) 師遷化日、寺内異香氤氳、經于七日。感得山崩地動、林木變白、日月無光、天地失色、羣鹿鳴叫、至夜不絕。先天二年八月三日、夜三更時、於新州國恩寺圓寂。餘在功德塔記具述。至十一月、韶・廣二州門人、迎師神座、向曹溪山葬。忽於龕内、白光出現、直上衝天、三日始散。韶州奏聞、奉勅立碑供養。

師の遷化の日、寺内に異香氤氳として、七日を経たり。山は崩れ地は動き、林木は變白し、日月は光無く、天地は色を失い、羣鹿は鳴叫し、夜に至るも絶えざるを感得す。先天二年八月三日、夜の三更の時に、新州國恩寺に於て圓寂す。餘は功德塔の記に在いて具に述ぶ。十一月に至り、韶・廣二州の門人、師の神座を曹溪山に迎えて葬る。忽ち龕内に於て白光出現し、直上して天を衝き、三日にして始めて散ず。韶州は奏聞して、勅を奉じて碑を立てて供養す。

八七 壇經の傳授者

(58) 此壇經法海上座集。上座無常、付同學道滌、道滌無常、付門人悟眞。悟眞在嶺南曹溪山法興寺、見今傳受此法。

*泊||泊(金)。*傳付||ナシ(金)。*見||現(興)(寛)。

此の『壇經』は、法海上座の集なり。上座無常して、同學の道滌に付し、道滌無常して、門人の悟眞に付す。悟眞は嶺南曹溪山法興寺に在りて、見^{げん}に今、此の法を傳受す。

八八 壇經相傳のこと

(59) 如付山法、須德座上恨知、心信佛法、立大悲。持此經、以爲衣承、於今不絶。

如^もし此の法を付せんには、須らく上根智にして心に佛法を信じ、大悲を立つるを得るべし。此の經を持して以て依承と爲して、今に絶えず。

八九 壇經流通のこと

(60) 和尚本是韶州曲江懸人也。如來入涅槃、法教流東土。共傳無住、即我心無住。此眞菩薩、說眞示實行喻。唯教大智人、是旨衣。凡度誓修修行、遭難不退、遇苦能忍、福德深厚、方授此法。如根性不堪、林量不得、須求此法、違立不

(65) 泊乎法海上座無常、以此壇經付囑志道。志道付彼岸、彼岸付悟眞、悟眞付圓會。遞代相傳付囑。一切萬法、不離自性中見也。

法海上座の無常に泊^ぼび、此の『壇經』を以て志道に付囑す。志道は彼岸に付し、彼岸は悟眞に付し、悟眞は圓會に付し、遞代相傳して付囑す。一切萬法は、自性の中を離れずして見するなり。

(得) 德者、不得妄付壇經。告諸同道者、今諸(令)(知)(密)蜜意。

和尚は、本是れ韶州曲江縣の人なり。如來は涅槃に入りたまひ、法教は東土に流る。共に無住を傳えて、即ち我が心、無住なり。此れ眞の菩薩、眞を説き、實を示し、喻を行す。唯だ大智の人に教うる、是れ指依なり。凡そ修行を誓修し、難に遇うも退かず、苦に遇うも能く忍び、福徳深厚なるを度して、方めて此の法を授く。如し根性堪えず、材量得ずんば、此の法を須求めんも、違立するを得ざる者は、妄に『壇經』を付することを得ず。諸の同道の者に告げて、密意を知らしむ。

九〇 尾題

(61) 南宗頓教最上大乘壇經法一卷

* 六祖壇經卷下 韶州曹溪山六祖師壇經卷終(金)(大)。

南宗頓教最上大乘壇經法一卷

九一 刊記・識語

(62) 大乘志三十、大聖志四十、大通志五十、大寶志六十、大法志七十、大德志八十。清之藏志三十、清持藏志四十、清寶藏志五十、清蓮藏志六十、清海藏志七十、大法藏志八十。此是菩薩法號。

(66)* 六祖壇經卷下

六祖壇經卷下

(67) 後敍。余嘗公暇、信覽曹溪六祖大師壇經、導化迷愚之人、令識本心、見本性、自悟成佛、莫向外求。言直理玄、法非法、不可思議。乃勸諸善、諦印經受持、獲大功德、無上菩提者也。

大中祥符五年歲次壬子十月八日、傳教弟子宣德郎守尙書屯田員外郎騎都尉賜緋魚袋周希古敍。都勸緣廣教院主僧 保昌。

一金花山人嚴方外書。瀧西卓海 刊字。

*後敘ハナシ(金)(大)(興)(寛)。(底)ハ「寫點了」ト書ス。(金)ハ刊記アリ(補10)。(大)ハ「道元書墨付八十四折」ト書ス。(興)ハ「慶長四年五月上中旬初拜誦此經伺南宗奧義了次爲新學加朱點△而已▽了然誌之慶長八年三月朔日至八日一遍拜讀之次加和點了記者同前」ト書ス。(寛)ハ別ノ刊記アリ(補11)。

大乘志三十、大聖志四十、大通志五十、大寶志六十、大法志七十、大德志八十。清之藏志三十、清持藏志四十、清寶藏志五十、清蓮藏志六十、清海藏志七十、大法藏志八十。此れは是れ菩薩の法號なり。

〔補注〕

(補1) 韶州曹溪山六祖師壇經序

性體虛空、本無名相、佛祖出興、示以正法者、良由衆生妄失其本也。故初有六佛、而釋迦紹出焉。釋迦七七年^{*}導化、復憫後五百歲鬪諍堅固。遂以正法付迦葉、受金欄^{*}信衣、俾妙明之種性不滅也。衣衣相授^(授)、法法相承、列位西乾二十有八、東土正法、自達磨始興、二祖出于北齊、三四興于唐代、曹溪六祖、得衣法於黃梅五祖。是時刺史韶牧等、請六祖於大梵戒壇、受無相戒、說摩訶頓法、門人錄其語要、命曰壇經。夫吾祖傳衣、三更受法、命若懸絲。而說是經、則普告僧俗、令言下各悟本心。現成佛道者何耶。蓋此非吾祖一時之直指、實欲傳乎後鬪諍之歲也。今則門風百種、解會千般、努眼撐眉、尋言舉古、忘情絕念、自縛無

後敘。余、嘗つて公暇に、『曹溪六祖大師壇經』を信覽するに、迷愚の人を導化して、本心を識り、本性を見て、自ら悟り成佛して、外に向つて求むること莫らしむ。言直にして理玄なり、法非法を法として不可思議なり。乃ち諸善を勸めて、諦かに經を受持せしめて、大功徳の無上菩提を獲しむることを印すなり。

大中祥符五年歲次壬子、十月八日、傳教の弟子、宣徳郎守尙書屯田員外郎騎都尉、賜緋魚袋、周希古敘す。都勸緣廣教院主僧、保昌。金花山人、嚴方外書す。瀧西の卓海、字を刊す。

繩、詆毀明師、紛紜矛盾。豈知有壇經之可龜鑑者哉。謹再刊傳、庶幾學者、悟其本焉。

政和六年丙申元旦。福唐將軍山隆慶庵比丘存中序并書。

*導||道(金)。*欄||欄(金)。*撐||撐(金)。

韶州曹溪山六祖師壇經序

性體は虛空にして、本より名相無く、佛祖の出興して、示すに正法を以てするは、良に衆生の妄りに其の本を失うに由るなり。故に初めに六佛有り、而して釋迦紹出せり。釋迦七七年導化して、復た後五百歳の鬪諍堅固を憫う。遂に正法を以て迦葉に付するに、金欄の信衣を授けて、妙明の種性を滅せざらしむ。衣衣相授、法法相承、位

を列して西乾二十有八にして、東土の正法、達磨より始めて興り、二祖、北齊に出で、三四、唐代に興り、曹溪の六祖、衣法を黃梅の五祖に得たり。是の時、刺史韶牧等、六祖を大梵の戒壇に請い、無相戒を授け、摩訶頓法を説かしめ、門人をして其の語要を録せしめて、命じて『壇經』と曰う。夫れ吾が祖の傳衣、三更に法を受け、命、懸絲の若し。而して是の經を説き、則ち普く僧俗に告げ、言下に各々本心を悟らしむ。現に佛道を成ずるは何ぞや。蓋し此れ吾が祖の一時の直指に非ず、實に後の鬪諍の歳に傳えんと欲するなり。今は則ち門風百種、解會千般にして、眼を努し肩を擲げ、言を尋ね古を擧げ、情を忘れ念を絶し、自ら繩無きに縛り、明師を詆毀し、紛紜として矛盾す。豈に『壇經』の龜鑑なるべき者有るを知らんや。謹んで再刊して傳え、庶幾くは學者の其の本を悟らんことを。

政和六年丙申元旦。福唐將軍山隆慶庵の比丘、存中序并びに書す。

(補2) 子健被旨入蜀、回至荆南、於族叔公祖位、見七世祖文元公所觀寫本六祖壇經。其後題云、時年八十一、第十六次看過。以至點句標題、手澤具存。公歷事太宗・眞宗・仁宗三朝、引年七十、累章求解禁職、以太子少保致仕。享年八十四。道德文章、具載國史。冠歲過高士劉惟一、訪以生遷之事。劉曰、人常不死。公駭之。劉曰、形死性不遷。公始寤其說。自是留意禪觀、老而愈篤。公平生所學、三教俱通。文集外、著昭德編三卷・法藏碎金十卷・道院集十五卷・耆智餘書三卷、皆明理性。

惠昕本『六祖壇經』の研究(續)(石井)

晩年尙看壇經、孜孜如此。子健來佐蘄春郡、遇太守高公世與。篤信好佛。一日語及先文元公所觀壇經、欣然曰、此乃六祖傳衣之地。是經安可闕乎。乃用其句讀、鏤版刊行、以廣其傳。壇經曰、後人得遇壇經、如親承吾教。若看壇經、必當見性。咸願衆生同證此道。

紹興二十三年六月二十日。

右奉議郎權通判蘄州軍州事晁子健謹記。

子健、旨を被りて蜀に入り、荆南に回至り、族叔公の祖位に於て、七世の祖、文元公の觀る所の寫本『六祖壇經』を見たり。其の後に題して、「時に年八十一、第十六次看み過ぎぬ」と云い、以て句を點り題を標し、手澤具さに存するに至る。公は太宗・眞宗・仁宗の三朝に歷事し、年七十なるを引き、章を累ねて禁職を解かれんことを求め、太子少保を以て致仕す。享年八十四なり。道德文章は具さに國史に載せたり。冠歲、高士劉惟一を過り、訪るに生遷の事を以てす。劉曰く、「人は常に死せず」。公、之れに駭く。劉曰く、「形は死するも性は遷らず」。公始めて其の説を寤る。是れより意を禪觀に留め、老いて愈々篤し。公の平生學ぶ所は、三教俱に通ず。文集の外、『昭德編』三卷、『法藏碎金』十卷、『道院集』十五卷、『耆智餘書』三卷を著わし、皆な理性を明らかにす。晩年にも尙お『壇經』を看む。孜孜たること此の如し。子健は來りて蘄春郡に佐となり、太守の高公世與に遇う。篤信にして佛を好む。一日語つて先の文元公の觀し所の『壇經』に及びし

に、欣然として曰く、「此は乃ち六祖傳衣の地なり。是の經安んぞ闕くべけんや」。乃ち其の句讀を用いて鏤版刊行し、以て其の傳を廣うす。『壇經』に曰く、「後人は『壇經』に遇うことを得ば、親しく吾が教えを承くるが如し。若し『壇經』を看ば、必ず當に見性すべし」。感願わくは衆生の同じく此の道を證せんことを。

紹興二十三年六月二十日。右奉議郎・權通判蘄州軍州事、晁子健、謹みて記す。

(補3) △祖謂明曰、不思善、不思惡、正與麼時、如何是上座本來面目。明大悟。√。

* 祖||唯(寬)。

△祖は明に謂つて曰く、『善を思わず、惡を思わず、正に與麼の時、如何なるか是れ上座本來の面目』。明、大悟す。√。

(補4) 至高宗朝、到廣州法性寺、值印宗法師講涅槃經。時有風吹旛動。一僧云旛動、一僧云風動。惠能云、非旛動風動、人心自動。印宗聞之竦然。

* 吹||有(寬)。* 一||二(寬)。

高宗の朝に至り、廣州の法性寺に到り、印宗法師の『涅槃經』を講ずるに值う。時に風の吹いて旛動く有り。一僧云く、『旛動く』。一僧云く、『風動く』。惠能云く、『旛動き風動くには非ず、人の心自ずから動くなり』。印宗之れを聞いて竦然たり。

(補5) 今與善知識、授無相懺悔、滅三世罪、令得三業清淨。善知識、各隨語一時道。弟子等、從前念・今念及後念、念念不被

愚迷染、從前所有惡業・愚迷等罪、悉皆懺悔。願一時消滅、永不復起。弟子等、從前念・今念、及後念、念念不被僞誑染、從前所有惡業・僞誑等罪、悉皆懺悔。願一時消滅、永不復起。弟子等、從前念・今念及後念、念念不被疽妬染、所有惡業・疽妬等罪、悉皆懺悔。願一時消滅、永不復起。

善知識、已上是爲無相懺悔。云何名懺、云何名悔。懺者、懺其前愆。從前所有惡業・愚迷・僞誑・疽妬等罪、悉皆盡懺、願不復起。是名爲懺。悔者、悔其後過。從今已後、所有惡業・愚迷・僞誑・疽妬等罪、今已覺悟、悉皆永斷、不復更作。是名爲悔。故稱懺悔。凡夫愚迷、只知懺其前愆、不知悔其後過。以不悔故、前愆不滅、後過又生。前愆既不滅、後過復又生。何名懺悔。

* 永||求(興)。以下同。

今、善知識の與に、無相懺悔を授けて、三世の罪を滅し、三業をして清淨なることを得しめん。「善知識よ、各々語に隨つて一時に道え。『弟子等、前念・今念より後念に及ぶまで、念念に愚迷に染せられず、從前の所有る惡業・愚迷等の罪を悉く皆な懺悔す。願わくは一時に消滅して、永く復た起こさざらん。弟子等、前念・今念より後念に及ぶまで、念念に僞誑に染せられず、從前の所有る惡業・僞誑等の罪を悉く皆な懺悔す。願わくは一時に消滅して、永く復た起こさざらん。弟子等、前念・今念より後念に及ぶまで、念念に疽妬に染せられず、所有る惡業・疽妬等の罪を悉く皆な懺悔す。願わくは一時に消滅して、永く復た起こさざらん』」。

「善知識よ、已上は是れ無相懺悔と爲す。云何が懺と名づけ、云何が悔と名づくる。懺とは、其の前の愆を懺す。從前の所有る惡業・愚迷・僞誑・疽妬等の罪を、悉く皆な盡く懺して、復た起こさざらんと願う、是れを名づけて懺と爲す。悔とは、其の後の過を悔ゆ。今より已後、所有る惡業・愚迷・僞誑・疽妬等の罪を、今ま已に覺悟して悉く皆な永く斷ち、復た更に作さず、是れを名づけて悔と爲す。故に懺悔と稱す。凡夫は愚迷にして、只だ其の前の愆を懺することを知って、其の後の過を悔ゆることを知らず。悔いざるを以ての故に、前の愆は滅せず、後の過又た生ず。前の愆既に滅せず、後の過復又た生ず。何ぞ懺悔と名づけん」。

(補6) 三科法門者、陰・界・入也。陰は五陰、色・受・想・行・識是也。入は十二入、外六塵、色・聲・香・味・觸・法、内六門、眼・耳・鼻・舌・身・意是也。界は十八界、六塵・六門・六識是也。自性能含萬法、名含藏識。若起思量、即是轉識、生六識、出六門、見六塵。三六一十八、由自性起用。自性若邪、起十八邪。自性若正、起十八正。含惡用即衆生用、善用即佛用。用由何等。由自性有。

三科の法門とは、陰・界・入なり。陰は是れ五陰、色・受・想・行・識是れなり。入は是れ十二入、外の六塵は、色・聲・香・味・觸・法なり、内の六門は、眼・耳・鼻・舌・身・意是れなり。界は是れ十八界にして、六塵・六門・六識是れなり。自性の能く萬法を含むを含藏識と名づ

く。若し思量を起せば、即ち是れ轉識にして、六識を生じ、六門より出だし、六塵を見る。三六一十八、自性に由つて用を起す。自性若し邪なれば、十八の邪を起す。自性若し正なれば、十八の正を起す。惡を含む用ならば、即ち衆生の用なり。善用すれば、即ち佛の用なり。用は何等に

か由る。自性に由つて有り。

(補7) 對法、外境無情五對。天與地對・日與月對・明與暗對・陰與陽對・水與火對。此是五對也。法相語言十二對。語與法對・有與無對・有色與無色對・有相與無相對・有漏與無漏對・色與空對・動與靜對・清與濁對・凡與聖對・僧與俗對・老與少對・大與小對。此是十二對也。自性起用十九對。長與短對・邪與正對・癡與慧對・愚與智對・亂與定對・慈與毒對・戒與非對・直與曲對・實與虛對・險與平對・煩惱與菩提對・常與無常對・悲與害對・喜與嗔對・捨與慳對・進與退對・生與滅對・法身與色身對・化身與報身對。此是十九對也。

對法は、外境の無情に五對あり。天と地との對・日と月との對・明と暗との對・陰と陽との對・水と火との對なり。此れは是れ五對なり。法相の語言に十二對あり。語との對・有と無との對・有色と無色との對・有相と無相との對・清と濁との對・凡と聖との對・僧と俗との對・老と少との對・大と小との對なり。此れは是れ十二對なり。自性の用を起すに十九對あり。長と短との對・邪と正との對・癡と慧との對・愚と智との對・亂と定との對・慈と毒との對

對・戒と非との對・直と曲との對・實と虚との對・險と平との對・煩惱と菩提との對・常と無常との對・悲と害との對・喜と嗔との對・捨と悭との對・進と退との對・生と滅との對・法身と色身との對・化身と報身との對なり。此れは是れ十九對なり。

(補8) 及び具王維碑銘。

△及び王維の碑銘に具にす。

(補9) 至元和十一年、詔追諡曰大鑑禪師。事具劉禹錫碑。

元和十一年に至り、詔して追諡して大鑑禪師と曰う。事は

劉禹錫の碑に具にす。

(補10) 僧△不遠▽緣化施財、莫信獎△孝恩▽興室中。陳△九

娘▽捨貳貫文。朱△最禮▽、朱△琬▽、李△三娘▽、各捨壹貫

文。鄭△誤▽、蕭△宗▽、陳△歿▽、張△六娘▽、各捨壹貫

文、省。王勉等十人、各捨伍佰文、省。結此勝因、普霑善果。

勸緣比丘、住保壽庵最樂。

都勸緣比丘、住安元報恩禪院賜紫祖印大師△紹資仍捨。貳貫

文、省▽。將仕郎陳捫捨俸金貳阡、爲母親獎△代六娘▽、願延

景福。仙谿林△師益▽。捨俸金貳阡、省、助緣。壇經之費、願

一切含靈、得聞此經、不涉二乘、悉證無上菩提。

その外に(金)ハ三八丁裏に

金山寶藏祕書、此壇經正本、賀州大乘寺室中有之外、扶桑之珍書也。

とあり、裏表紙の内側に、

延享四丁卯七月、再修表帙、備足落字。天寧現住白英記。小子

祖鏡修補。

とあり、また、帙底の内側に、

延享四丁卯七月上旬、再修表帙、而備足闕文蝕字。金山天寧常住現白英惠玉記焉。

此壇經全部二卷、出于金山寶藏祕函之中矣。今流布于世叢林壇經、舊刊新削不一、或多数省分門字數皆失。本經之正者聞有之、末流學者、不能無疑於其間也。特祕賀北洞宗大乘禪寺寫本壇經耳、爲正本傳焉。今以此二册考合之、不違一字、只有闕紙數枚爲恨而已。幸得賀北正本寫書、而書加而備足之。永莫廢失。至囑。

とある。

(補11) 寛永辛未暮春吉且、中野市右衛門梓行。

一九八〇・七・一三

〔付記〕この論文は昭和五十四年度駒沢大学特別研究個人研究費による研究課題「惠昕本『六祖壇經』の研究」の研究成果報告の一部である。